

清末小説から 123

2016.10.1

林訳『伊索寓言』の底本(上) 挿絵の謎を解く.....沢本郁馬 1
(女櫛杵) 罕見林訳研究資料.....古 二 徳24
漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 3 「区別がつかない論」再び.....樽本照雄28
清末小説から36

「いくたびかの阿英目録」は本号休載です。清末小説研究会は <http://shinmatsu.main.jp> へ移転しました。樽本著作の増補版3種類をウェブで公開する予定。本号37頁をご覧ください

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

林訳『伊索寓言』の底本(上) 挿絵の謎を解く

沢本郁馬

林紓、巖君潜、巖伯玉が漢訳した『^{イソップ}伊索寓言』は、ほかの林訳小説とは性格が異なる。原作がイソップ寓話であるためか挿絵を多数掲載する。小説ではないので商務印書館の「説部叢書」「林訳小説叢書」には収録されない。阿英目録にも見えない。商務印書館自刊の『涵芬楼新書分類総目』では「文学部・雑類」に配置している(42頁)。教科書は「文学部・読本類」に入れ

ているから、それとも区別する。

イソップ寓話の原書は多種多様だ。英訳にかぎってもその数はあまりにも多い。アラビアン・ナイトがそうであるのに似ている。

誰でも知っているイソップ寓話と著名な林紓の組み合わせだ。漢訳に使用した底本はすでに特定されているだろうと思う。ところが、そうではないらしい。どの原本に基づいて林訳『伊索寓言』が成立したのか。林訳は1903年初版から110年以上にわたり、底本不明のままである。関連論文も多く書かれているのに誰も底本を特定していないのか。不思議だと感じる人が多いのではなからうか。

私が、林訳『伊索寓言』の底本を特定する。なお、本稿で使用する『伊索寓言』は林訳を意味している。

まず、従来の研究を見ることからはじめよう。

1 林紓冤罪事件の再生産

胡從経(1982)*1は、中国では一般的な紹介のしかたをしている。

各寓話に林紘がつけた評語を主として取りだす。当時の政治状況について林紘がどのように考えていたかを述べる。のちによく見る書き方だ。底本を問題にする必要がない。これも定型だ。『希臘名士伊索寓言』の初版を「丙午年(1906年)十一月」とするのは、後の重版を見てそう記した。正しくない。初版は1903年刊である。

現在の中国学界では、ひとりの林紘批判一辺倒ではなくなったようにも見える。林訳研究論文も多く発表されている。だが、研究者たちは立論を急いでいるようだ。短い論文のなかで結論をなんとかしても出そうとする。底本の確定という目立たないが重要な基礎研究は、手間ヒマがかかるために顧みられない。『伊索寓言』について、底本不明にもかかわらず研究者は論文を書き続けている。底本問題は無視して、彼らはなにを主張しているのだろうか。

鮑延毅(1991)*2がいる。はるか後の1981年版人民文学出版社本の漢訳イソップ寓話と本文を対照し、「翻訳は基本的に原文と合っている」(78頁)と書く。林訳の底本を探す気は最初からない。

王輝(2011)*3である。林訳が使用した「原文」がどの英訳本かは調べようがない(47頁)と明言している。だが、林訳第70話について、「訳者は、いくらか社会風俗教育に悪影響のある箇所は故意に「脱落(原文:遺漏)」させた」(47頁)とわざわざ書く。その根拠は、2005年にギリシア原文から漢訳されたイソップ寓話と読み比べてのことなのだ。底本でないものを基本において、林紘たちが忠実に漢訳していない、勝手に省略した、と王輝は批判する。林紘にしてみれば、まさに冤罪である。いまだに濡れ衣を着せられている。

つぎは、衛末(2014)*4だ。使用した林訳は北京・商務印書館1912年版だという。上海の間違いだろう。引用して表題を「狼与小羊」とする。ここも間違っている。林訳では各寓話に題名はついていない。存在しないものを無理矢理

に「狼与小羊」だと題するのは研究として正しくない。しかも、底本が不明であるにもかかわらず、林紘は大きな書き換えを行なった(林紘則進行了較大的改動)と説明するのはなんだろうか(54頁)。「林紘の翻訳は多くが「意識」である(林紘的翻訳多是“意識”)」(54頁)という。底本と照合してもいないのにそう書くのは、衛末の妄想である。現在も林紘に無実の罪を押しつけているのだ。

さらに、馮維維(2015)*5の論文がある。「林訳《伊索寓言》改写研究」という表題からわかるように、『伊索寓言』において林紘がどのように本文を書き換えたかを述べている。英文原作を引いて林紘は省略して漢訳していると説明する。「原文の情景について時間の常套句および物語の主人公の性質などを削除してしまった」(94頁)。その原文とは、注4に説明して「Aesop, Aesop's Fables [M], Shanghai: Commercial Press, 1852」(95頁)だ。あとで紹介する蘇建新も指摘しているように、1897年に創立した商務印書館が、それより以前の1852年に英文書籍を出版することはありえない。そもそも『伊索寓言』の底本ではないものを基準にして、原文を書き換えたと批判するのは、林紘に対して失礼だ。馮維維は、林訳については何を書いて貶めてもよいと考えているらしい。該文がありもしない林訳の欠陥を捏造しているのは読みながら痛々しく感じる。研究の出発点を誤っているのだ。担当編集者は、執筆者に学報への掲載を遠慮するよう助言すべきだった。

そして、黄幼嵐(2015)*6である。『伊索寓言』について北京・商務印書館1906年と誤る。商務印書館が上海で創業したのを知らないのだろうか。1903年初版だから1906年のものは重版か。そうならばそう説明すべきだ。林紘は原文(第142則「芦葦和橄欖樹」)を書きかえた(96頁)。また「牛と蛙」でも林訳は原文からとても遠くに離れてしまった、と断定する(97頁)。いずれも林訳の底本ではない2002年刊行の漢訳

イソップ寓話を基準にして林紘が間違っていると批判する。こちらにも研究論文として成立していない。林訳の底本を示していない黄幼嵐の方が根本的に誤っている。黄幼嵐は「長期にわたって林紘翻訳中の「忠実ではない」および「誤り」は学者から批判と非難を十分に受けてきた(長期以来, 林紘訳作中の“不忠”与“訛”飽受学者批評与詬病)」(97頁)と書いて林紘を意図的に低く評価する。

林紘はシェイクスピア、イプセンの戯曲を小説に書き換えた。小説と戯曲の区別もつかないほど無知である。研究者の全員がそう書いて林紘を非難し嘲笑しつづけていたのが事実だ。ところが、それは冤罪であった。明らかにしたのは、樽本照雄『林紘冤罪事件簿』(清末小説研究会2008.3.31)だ。

鮑延毅、王輝、衛未、馮維維および黄幼嵐たちは、『伊索寓言』について底本を特定せず、関係のないいわゆる「原文」と照らし合わせた。そうして、多くは林紘が勝手に原文を書き換えたと批判する。五四時期前後の昔から同じ誤りを1世紀をこえて現在もくり返す。新たな冤罪事件を引き起こしているといっている。これが今の中国学界の基調なのだろうか。ならば、林訳に対する基本姿勢は従来どおりで、なんの変化もないということだ。冤罪の再生産である。

このたび『伊索寓言』の底本について蘇建新(2016)*7が、新しい見解を提出した。こちらは注目に値する。

2 従来の底本研究と新展開

蘇建新は、先行研究者として次の名前をあげた。馬泰来、寒光、ヒル Micale Gibbs Hill (韓嵩文)、コンプトン Robert Compton、張治、郭延礼らである。結局のところ底本は謎のままだという。

蘇建新よりも先に、呂維維(2015)*8が文章を発表している。

呂維維は、イソップ寓話のタウンゼンド

George Fyler Townsend 英訳本にもとづき『意拾諭言』と『伊索寓言』の本文を検討した。なぜタウンゼンド本を基本にするのか。それは、19世紀より最も広く流布しているとしているだけ。タウンゼンド本が『伊索寓言』の底本であるといっているわけではない。そこにあったものを利用したという印象が強い。また、『伊索寓言』と書名を出すだけでそれについての書誌を明示してはいない。

蘇建新は、呂維維論文に言及しないが、結果としてそこから底本探索を一步進めたことになる。大要は以下のとおり。

上記ヒルの研究論文を引用しつつ林訳の本文に類似する版本を探索した。見つけたのは、汪原放訳『伊所伯的寓言』(1929)だ。狼と子羊の挿絵を掲載する「狼和小綿羊」ほかの本文が、林訳の漢訳に酷似していることに気づいた。汪原放訳の原本は、George Fyler Townsend's translation of Aesop's Fables だと汪自身が記している。

呂維維のいうタウンゼンド本がここにも出てきた。

蘇建新は、さらにタウンゼンド本には2種類があることにも触れる。詳しく調べていることがわかる。すなわち、Three Hundred Aesop's Fables、および Three Hundred and Fifty Aesop's Fables だ。蘇建新が見たのは、ウェブサイトのプロジェクト・グーテンベルグにあるタウンゼンド本の1880年第10版だという。

蘇建新はそこまで追跡した。ところが、最終的にどの版本が底本であるのか確定してはいない。結論がない。私は意外に思う。

同じタウンゼンド本でも版によって寓話の順序が違う。それが結論を得ることのできない原因だともいう。

結論にはいたらなくても、底本特定に大きく近づいた事実にはかわりない。

蘇建新の新しい指摘は、検討する価値がある。なぜなら、底本を探し当てることができない、と断言している先行論文があるからだ。底本が

見つからないという従来の見解を覆す可能性がでてきた。

3 底本はない ヒルの見解

「ない」と断言したのはヒルの論文*9である。

ヒルが使用した『伊索寓言』は、上海図書館所蔵の1903年第四版だと書いている。初版ではない。また、ハーバード・イエンチング(哈仏燕京大学)所蔵の1922年第十八版にも言及する(128頁)。

ヒルは、底本についてコンプトンがフランス語の可能性があると述べたのを否定した。

しかしながら、今現存している約100冊にのぼる18、19世紀の英語訳、フランス語訳『イソップ寓話(伊索寓言)』を見ても、林紓の『伊索寓言』物語の順序、あるいは版画(注:挿絵)に対応する原文の版本はまったく存在しないのである。130頁

ヒルは、林紓らの漢訳したイソップ寓話の順序と挿絵が一致する原書はない、と言い切っている。100冊以上の英語、フランス語版本を点検したからこそ書くことのできた文章だといえる。ヒルが資料を利用できる研究環境にいることもわかる。

英仏語版本を広く探索した結果に出てきたヒルの判断だ。『伊索寓言』の底本は、特定することができない。これが、彼の得た結論だった。

「ない」という結論がすでに下されている。「ない」という事実を証明することはむづかしい。だが、一般の研究者は、その段階で追求することをあきらめるだろう。調査すべき版本の数の膨大さを考えれば、あえて自ら探そうとは思わないのではないか。アラビアン・ナイトの時と同じだ。

しかし、蘇建新は違った。タウンゼンド本である可能性を強く示唆するところまで道を開いた。ただ、最終的な結論を提出していないのが

残念だ、

私が考えるに、さらに探索を推し進めるためには、いくつかの準備が必要となる。とはいえ、研究では常識の範囲内のことである。

4 底本探索の準備

最初にやるべきは、『伊索寓言』そのものを見ることだ。研究の基本である。

この当たり前のことをわざわざ書く理由はなにか。

『伊索寓言』には各種の版本がある。本文を組み直した復刻単行本などの形で流布していると思われる。最近では以下の2種が出た。

顔瑞芳編著『清代伊索寓言漢訳三種』台湾・五南圖書出版股份有限公司2011.3。
庄際虹編『伊索寓言古訳四種合刊』上海大学出版社2014.8 近代名訳叢刊

いくつかの漢訳イソップ寓話を収録したなかには林訳が含まれる。ついでながら、イソップ寓話を漢訳で一般に「伊索寓言」と表記するのは、林訳にはじまる。

それらを見るだけで足りる、と研究者は考えるのだろうか。しかし、上記の復刻本には、基づいた林訳の版本についての説明がない。訳文は全300話を収録するが、挿絵は掲げていない。各寓話に編者が勝手に題名をつけている。実態は以上のとおり。林訳だといっているが、不完全本である。

ヒルが使用したのは、上海図書館所蔵の第四版だという。第四版が現存する「最古」だと記すところに彼の自信が表われている。調査を徹底的に行なったという自負であろう。そうすると、初版は現存しないという意味だろうか。

版本が多数存在しているはずだ。それでも、ヒルは初版を見つけることができなかった。

どのようなかたちであれ初版を確認し、さらに重版も参照する。これが研究の基本手順だ。

私が知らないだけなのか、初版と各版の相違について書いた文章を読んだことがない。それとも、初版はのちの重版とまったく同一だから説明の必要がない、ということなのか。そうならば、ひとこと書くだけで充分だったはずだ。それがなければ、今まで『伊索寓言』の各版本を比較対照した研究者はいないことになる。底本特定とは別に、これは驚くべき知的怠慢だろう。

それらを確認するためには、『伊索寓言』そのものを見るほかない。

5 本文と挿絵

『伊索寓言』については、研究者たちにひとつの固定した考えが存在している。それを示しているのが上に見るヒルの説明だ。

確認のため原文を引用してもう一度示す。

「林紘の『伊索寓言』物語の順序、あるいは版画(注:挿絵)に対応する原文の版本は決して存在しない(并不存在与林紘《伊索寓言》故事的順序或版画相对应的原文版本)」である。

寓話の配列順序、あるいは挿絵と一致する原文が存在しない。寓話本文と挿絵は緊密に組み合わせられている。両者は分離不可能なものとして認識されている。

『伊索寓言』の挿絵は、底本特定のための重要な手がかりだ。研究上の常識であり鉄則だ*10。当然のことだから誰も不思議には思わない。挿絵の全部をひとりの画家が描いた。普通は、そうだろう。だが、この認識を『伊索寓言』にも適用できるのだろうか。その思い込みが、底本問題の解決を阻碍しているのではないか。

林訳のばあいは、それぞれの挿絵を詳細に点検する必要がある。そうすれば自然にある謎が浮かび上がってくる。この謎を解くことが底本問題を結論に導くことにつながる。

6 『伊索寓言』初版

『伊索寓言』の初版本は、存在する。日本の

故増田渉が所蔵していた。現在は関西大学図書館増田渉文庫に収蔵されている*11。ほかで見ることができない初版であることが珍しい。底本探索には、欠かせない版本だ。



増田渉旧蔵(図2)奥付

(図1)表紙

書籍情報は、以下のとおり(その表紙と奥付の写真を関連書籍から引用する)。

(伊索 AESOP) 林紘畏廬、巖培南君潜、巖璩伯玉訳述『(希臘名士)伊索寓言』300則、上海・商務印書館 光緒二十九年五月(1903)首版

本稿では、増田旧蔵本の影印を使用する*12。増田渉(1983)*13自身による説明がある。関連する3カ所から引いて示す(ルビ省略)。

この林琴南(名は紘)訳の『伊索寓言』を筆者は架蔵するが、光緒壬寅(二十八年)の序があり、翌光緒二十九年(一九〇三年)に上海の商務印書館から出版されている。筆者の蔵本は訳者の林琴南から北京公使館員の中島氏がもらったもので、表紙に墨で「畏廬先生手贈」と書かれている。畏廬は琴南の別号である。(後略)56頁

林琴南は文章家として知られていたが、横文字は読めなかったし、巖復の甥の君

潜、長子の伯玉の協力で『伊索寓言』を訳したことが序に見える。本文は鉛活字で、銅版の挿図が多い。この挿図は宍戸璣の「間々人物飛走を図す」という上海版『伊娑菩諭言』から採ったものかどうかは未詳だ。それぞれの説話の末尾に「畏廬曰」として林琴南の評語がついている。林琴南の訳文は前記『伊娑菩諭言』（阿部及び小野の訓点本による）の訳文とは調子がまるでちがっていて、簡潔で、ひき締り、古典中国文そっくりの文体になっている。56-57頁

『伊索寓言』一本。林紘のイソップ訳。表紙に達筆で「畏廬先生手贈」と墨書され、更に別人の筆で次行に「荊野中島先生贈之 楸邨署」と濃く墨書し、その下に「高宮氏」の朱印がある。林紘から中島氏が手贈され、それを更に高宮氏に贈ったものであることが分る。この本は林紘が嚴復の甥の君潜、長子の伯玉と共訳したものであり、鉛印で精密な銅版の挿図がほとんど毎頁にある。129頁

中島荊野は、雄（1853-1910）だろう。『伊索寓言』が刊行された1903年に中島雄は北京公使館に勤務していた。

高宮楸邨は、議（1875-1926）。北京順天時報社で筆をとった*14。

ふたりとも北京に在住し、『伊索寓言』を贈り贈られという機会があったと推測できる。

増田は、所蔵本が初版であることを書いていない。ほかにも多数の貴重書を所蔵していたから、それだけを強調する気持ちはなかったらしい。珍しい版本といわなければならない。該書の編者である故伊藤漱平は、その貴重性を理解していた。ゆえに口絵に表紙写真を掲げている。本稿に示した（図1）。

挿絵について言及しているのも重要だ。「鉛印で精密な銅版の挿図」と書いている。増田が

詳しく観察したとわかる。「上海版『伊娑菩諭言』から採ったものかどうか」と疑問を出した。私は見たが、挿絵に共通点はなかった。増田は、『伊索寓言』の挿絵に関心を持っていた。底本を探っていたのだろう。ただし、自分の考えを表明することはなかった。

小さなことを指摘しておきたい。表紙に「畏廬先生手贈」と書かれていると増田はいう。表紙の薄れかかった文字を写真で見れば「林」がある。増田は書き誤ったらしい。事實は「畏廬林先生手贈」だ。

7 初版の挿絵について 挿絵を探索

『伊索寓言』に収録された全300話の寓話には、41点の挿絵がついている。かなりの数だといっている。

畏にかかったライオンが縄に苦しみ上向いて口を開けて咆哮する。「ライオンと鼠」（図3）だ。



（図3）林訳第1丁オ



（図4）林訳第5丁オ

林訳の各寓話には、表題はつけられていない。そのため実物は本文の切れ目が見だしにくい。原本で確認した研究者は、かえって寓話の総数を間違える。とばし読みがましい。

橋の上にはいつくばった犬が川面の影を見つめる。「犬と影」（図4）だとすぐにわかる。

ヒルが、林訳の挿絵と一致する原本はない、とすでに述べている。だが、やはり自分の目で

確かめることから始めるしかない。検索作業と並行して研究論文にも目を通す。

三宅興子(2009)*15の論文から人名を以下のように抜き出す。よく知られた画家たちだという。

- 1722 サムエル・クロークソール Samuel Croxall
 1818 トマス・ビューイク Thomas Bewick
 1848 トマス・ジェームズ Rev. Thomas James, M. A.
 訳 203話 ジョン・テニエル John Tenniel 挿
 絵98点 / 1858ジョゼフ・ウルフ Joseph Wolf 挿絵19
 点を描き換え
 1867 タイラー・タウンゼンド Geo. Tyler Townsend
 訳 ハリソン・ウエア Harrison Weir (別の箇所
 ではハリソン・ウエア)

ここにもタウンゼンドが出てくる。訳者として著名なのだ。ウエアが挿絵をかいている(後述)。

また、以下の2種類も参考にした。

- 渡辺和雄訳『イソップ寓話集』全2巻 小学館(1)1982.11.3、
 (2)1982.12.25
 ラッセル・アッシュ、バーナード・ヒットン編、秋野
 翔一郎訳『クラシック イラストレーション版 イソ
 ップ寓話集』童話館2002.2.15 / 2011.1.20第七刷

後者の解説から画家の名前を抽出する(名前の原文綴りは掲げられていない)。

- 1484 イギリス ウィリアム・キャクストン
 1666 フランシス・パーロー
 1668 ウェンセスラウス・ホラーラー
 1722 イライシャ・カーカル 木版
 1818 トーマス・ピウィック
 1848 ジョン・テニエル「不思議の国のアリス」も 木版
 1857 チャールズ・ヘンリー・ベネット 彩色木版
 1869 アーネスト・ヘンリー・グリセット
 1883 ランドルフ・コルデコット
 1887 ウォルター・クレイン フォト・エッチング彩色
 1894 リチャード・ハイウェイ

- 1895 チャールズ・ロビンソン
 1899 パーシー・J・ビリングハースト

以上のように多数の画家がいる。だが、『伊索寓言』に該当する挿絵は上のどこにもない。

同時にウェブを検索して挿絵をできるだけ見た。刊年は書籍によって異なっている。あくまでも目安だ。ひたすら『伊索寓言』の挿絵と一致するものを探す。

以下は、挿絵をともなっている英語、フランス語本の一部だ。挿絵のないものは掲げていない。また、網羅しているわけでもない(HATHITRUST Digita Library を利用した。感謝)。

- 1802 挿絵画家不記
 1809 R. Dodsley 編、挿絵画家不記
 1811 Samuel Howitt 挿絵(縦組み)
 1819 フランス語、挿絵画家不記
 1820 Jefferys Taylor、挿絵画家不記、韻文
 1830 フランス語、挿絵画家不記
 1837 第5版 Richard Scampton Sharpe 編、82点木版、挿
 絵画家不記、韻文
 1839 フランス語、挿絵画家不記
 1842 挿絵画家不記
 1847 挿絵画家不記
 1848 挿絵画家不記
 1854 Marmaudke Park、挿絵画家不記
 1855 挿絵画家不記
 1855 挿絵画家不記
 1856 Edward Baldwin、挿絵画家不記
 1859 フランス語、J. J. Grandville 挿絵
 1859 Harrison Weir 挿絵13点(縦組み)
 1860 Charles. H. Bennett 挿絵、Swain 刻、彩色
 1865 H. W. Herrick 挿絵111点
 1866 フランス語、Karl Girardet 挿絵
 1868 Walter Thornbury 訳、Gustave Doré 挿絵、韻文
 1868 Henry L. Stephens 挿絵
 1869 挿絵画家不記
 1871 Thomas Bewick 木刻挿絵
 1872 挿絵画家不記
 1878 Ernest Griset 挿絵

- 1878 G. Washington 編、F. S. Church 挿絵
- 1883 Randolph Caldecott 編、J. D. Cooper 挿絵
- 1884 フランス語、K. Girardet 挿絵 (未確認)
- 1885 Ernest Griset 挿絵
- 1886 J. H. Stickney 編、挿絵画家不記
- 1887 Walter Crane 編、Edmund Evans 彩色挿絵
- 1890 Joseph Jacobs 編 (Richard Heighway 挿絵)
- 1892 Mara L. Pratt 編、挿絵画家不記
- 1895 Mary Godolphin 編、Lucy Aikin 挿絵
- 1895 Carl van Sichem 挿絵
- 1897 mons de Meziriac 編、挿絵画家不記
- 1898 William Adams 編、挿絵画家不記
- 1900 Walter Crane 編、Edmund Evans 彩色挿絵
- 1902 Joseph Jacobs 編、Richard Heighway 挿絵



(図5)



(図6) 林訳第36丁ウ

これは『伊索寓言』第36丁ウに掲げられた挿絵(図6)と同一だ。

すると新たな疑問が生じる。林訳の挿絵は、なぜこの「ライオン、熊と狐」1点だけしか採用しなかったのか。同じ『伊索寓言』なのだから別の挿絵も使ってもいい。たとえば、「ライオンと鼠」(図7)は林訳にもある方が理解しやすい。

ヒルが述べる約100冊には遠く及ばない。以上の書籍にも『伊索寓言』所収の挿絵に該当するものがない。流布するというタウンゼンド本とも違う。ここが重要だ。タウンゼンド本が『伊索寓言』の底本ではないか、という蘇建新の指摘がある。原則からいえば、タウンゼンド本ならば挿絵もウイア画でなければならない。林訳本の挿絵がそれと異なるのはどういう理由だろうか。

例外的にひとつだけ一致するものを見つけた。

8 挿絵の謎

ウイア (Harrison Weir, 1824-1906) 画の *THE CHILDRENS PICTURE FABLE-BOOK CONTAINING ONE HUNDRED AND SIXTY FABLES WITH SIXTY ILLUSTRATION BY HARRISON WEIR.* (BOSTON: TICNOR AND FIELDS. 1860. 電字版。序文なし。95頁) である。

該書の寓話「ライオン、熊と狐」につけられた挿絵を見る。

手前に大きく黒色の熊を描き、中程に雄のライオンが横たわっている。少し離れて狐が同じくらいの大きさの小動物(本文は fawn 子鹿)を首のところでくわえて遠ざかりつつある(図5)。



(図7)



(図3)

ところが、林訳の挿絵(図3)はそれではない。

ウイアの挿絵が出てきた。これは前述タウンゼンドの挿絵を描いたことで知られている。ところが、「ライオンと鼠」で示したように、『伊索寓言』は基本的にウイアの挿絵ではないのだ。

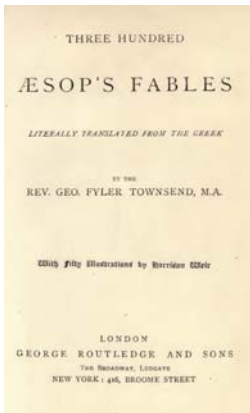
つぎはタウンゼンド本について説明する。

9 タウンゼンド本とウイア挿絵

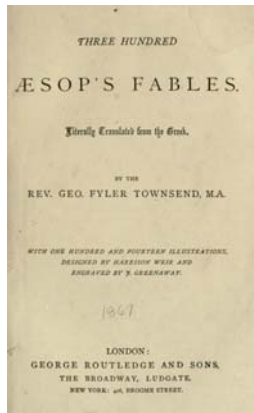
タウンゼンド Reverend George Fyler Townsend (1814-1900) といえ、アラビアン・ナイトを英訳したことで有名だ*16。

タウンゼンド版イソップ寓話は、大きくふたつに分かれる。収録する寓話の数が違う。以下のとおり (Opne Library、google ブックスを利用した。感謝)。

1 いわゆる300本 (313話収録)。さらに挿絵50点を収録する版本と挿絵114点収録のふたつに分かれる。



(図8) タウンゼンド 300絵50本



(図9) タウンゼンド 300絵114本

1-1 挿絵50点

REV. GEO. FYLER TOWNSEND, M.A. *THREE HUNDRED ÆSOP'S FABLES.* (WITH FIFTY ILLUSTRATIONS BY HARRISON WIER) LONDON: GEORGE ROUTLEDGE AND SONS, 刊年不記(1867?) 電字版

挿絵は50点だ。詳しくいえば、本文とは別に扉絵が1点、カットが1点ある。

目印として作品をひとつ指定する。最後尾 (188頁) の作品は題名を「THE BRAZIER AND HIS DOG. 真鍮職人と犬」という。別の版本と区別

するための手がかりにする。別の版本において同寓話はだいが前の位置に移動しているからだ。ほかにも異同はあるが、目立つこの1話だけにとどめる。

これを**タウンゼンド300絵50本**と称す。

1-2 挿絵114点

REV. GEO. FYLER TOWNSEND, M.A. *THREE HUNDRED ÆSOP'S FABLES.* (WITH ONE HUNDRED AND FOURTEEN ILLUSTRATIONS) LONDON: GEORGE ROUTLEDGE AND SONS, 刊年不記(手書きで1867) 電字版

同じ内容の別版本を以下の通りに見た。1867、1868、刊年不記、1871、1882、刊年不記 (手書きで1889) など。

挿絵を50点から114点に増やした版本である。扉絵、カットはない。

作品の掲載順序が異なる。

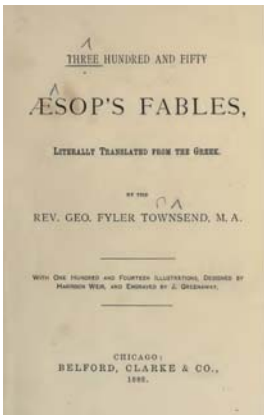
目印作品の THE BRAZIER AND HIS DOG. は88頁に置く (版本によってページが違うばあいがある)。タウンゼンド300絵50本が最後尾に配置したのとは、そこが一致しない。

また、別の出版社が出したものもある。NEW YORK: McLOUGHLIN BROTHERS, PUBLISHERS 刊年不記(1870)、あるいは CHICAGO AND NEW YORK: BELFORD, CLARDE & CO. 1885など。

これを**タウンゼンド300絵114本**と称す。

2 いわゆる350本 (352話収録)

REV. GEO. FYLER TOWNSEND, M.A. *THREE HUNDRED AND FIFTY ÆSOP'S FABLES.* (WITH ONE HUNDRED AND FOURTEEN ILLUSTRATIONS, DESIGNED BY HARRISON WIER, AND ENGRAVED BY J. GREENAWAY) CHICAGO: BELFORD, CLARKE & CO., 1882 電字版



(図10) タウンゼンド350本 (図11)

350本の変更はつぎのとおり。

タウンゼンド300絵114本の3話(63-64頁)を253-254頁に移動する。寓話の数を40話増やし合計353話となった。増加分の寓話には挿絵をつけていない。挿絵はタウンゼンド300絵114本と同じ。扉絵1点は、タウンゼンド300絵50本にあるものと一致する。

これをタウンゼンド350本と呼ぶ。

問題は、上のようにタウンゼンド300本とありながら収録した挿絵の数が異なる版本(絵50点と絵114点の2種類)が存在していることだ。刊年不記だが同年出版らしい。これが理解をさらに困難にしている。

底本問題を考えるときに、もう一度ふれる。

さて、Reverend(牧師)が省略されてREV.である。挿絵はウエアが描いてそれを彫師グリーナウェイが刻んだ。昔は画家と彫師は分業だ。日本の浮世絵と同じこと。

上のタウンゼンド300絵50本は、日本語に翻訳されている。次のとおり。

希臘伊蘇普原題、英国都運箋士直訳、日本若菜蝴蝶校正、田中達三郎訳『伊蘇普物語』1888.3.10 / 1896.9.2訂正八版 / 国文学研究資料館2012.12.3リプリント*17

田中本は、最後尾に「第三百十三 鍛冶工と犬の話」を置く。底本は、和訳して都運箋士の

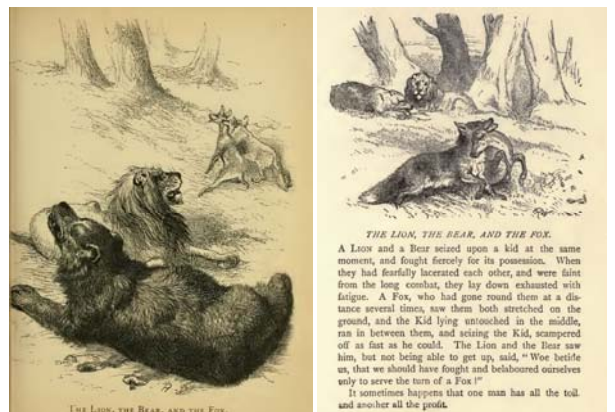


タウンゼンド300絵50本である。図12を見れば、田中本は原書から挿絵をほぼ同じ精密さで複製していることがわかる。ただし、ウエアの署名は削除する。原書の挿絵(図13 THE LION AND THE MOUSE.)を掲げる。



(図12) (図13) タウンゼンド300絵50本31頁

ウエア画「ライオン、熊と狐」(図5)が『伊索寓言』に使われていることを指摘した。ところが、タウンゼンド300絵50本収録の挿絵(図14)は、動物(本文はkid 子山羊)をくわえた狐を前面に配置し、後方に寝そべる熊とライオンを描いている。ウエアは同じ寓話をもとにして別の挿絵をかいた。



(図14) タウンゼンド300絵50本107頁

挿絵のこういう違いが、ヒルの底本探しを失敗に終わらせた原因だろう。挿絵がウエア画のタウンゼンド300絵50本と違うから、『伊索寓

言』の底本と一致する原本は存在しない、という結論になったものと思われる。

ただし、蘇建新がそこをあえてタウンゼンド本だと主張したのは、本文の類似をより重視したためだ。挿絵について検討したかどうかはわからない。蘇論文には挿絵についての言及がない。

『伊索寓言』の底本がタウンゼンド本だと立証するためには、本文のほかに挿絵との関連をまず説明しなければならない。挿絵の謎という理由だ。挿絵が一致しないから、今までは底本としてタウンゼンド本の名前があがらなかったと思われる。

10 挿絵の謎が深まる 不統一感

『伊索寓言』に収録された挿絵は、イソップ寓話に関連するものだという思い込みがある。だから、その不統一さを指摘した研究者はいないようだ。

前出のヒルは次のように説明している。翻訳して引用する。

本書(注:『伊索寓言』)を見れば使用しているのは写真石印技術、あるいは類似の印刷技術によって西洋原文の図画(図三、図四)を複製している。大部分の図画はこの種の複製した図画を使用しているが、ただしいくつかの図画はいわゆる「貼り絵(剪貼画)」、あるいは本書のために特別に設計したようだ。140頁(注:図は後で示す。ヒル図三左は本稿の図21。ヒル図四右は本稿の図53)

ヒルはほかの研究者と同じように、『伊索寓言』の挿絵がイソップ寓話と切り離すことができないと考えている。だから底本の特定に失敗したのだ。

ヒルの原文が「剪貼画」だから「貼り絵」と訳した。実際は木刻だ。いくつかは「本書のた

めに特別に設計した」挿絵だと言っている。

『伊索寓言』のためにわざわざ新しく作成したと説明する。違うのではないか、という疑問はでてこなかった。林訳の文章と挿絵は分離不可能だという考えから抜け出ることができなかったからである。

『伊索寓言』に掲載されているひとつの挿絵に私の目がとまった。私はこれを知っている。清末の小説専門雑誌でよく見ているから瞬時にわかった。ほかのものとは画調が明らかに違う。絵柄も奇妙だ。

第35丁ウに掲げられた猿の絵(図15)である。



(図15) 林訳第35丁ウ (図16) 『新小説』第6号



(図17) 『小説林』創刊号

右の大きい猿は果物(?)を左手にもち横木に腰かけ、ヒモでつながれている。左の小猿2匹はちゃんちゃんこを着て、これもヒモで横木につながれている。ほかの挿絵が主として自然の中にいる動物を描いているのとは異なり違和

感がある(今、人物が登場する挿絵は問題にしていけない)。絵の精度にしてもほかと比較して稚拙だし、絵柄はどう見ても日本猿だ。

この日本猿は、イソップ物語とはなんの関係もない。タウンゼンド、ウイアとは別の世界のものなのだ。複数の清末小説雑誌に誌面の空白を埋めるカット(埋め草)として使用されている。日本で普通に見られるものを、中国人が自分の編集刊行する雑誌に取り入れた。

とりあえず『新小説』と『小説林』をあげておこう。ほかにもあるだろうが、紹介するにはこのふたつで充分だ。

『新小説』第6号(1903.8.7)154頁にある(図16)。『小説林』創刊号(1907)の該当ページ(図17)と一緒に示す。

『新小説』は日本で印刷製本されたのち中国に輸送された。上海の『小説林』も『伊索寓言』よりも遅い刊行だが、刊行年月のずれが問題ではない。時空をこえて同じ猿の図柄であることが重要なのだ。

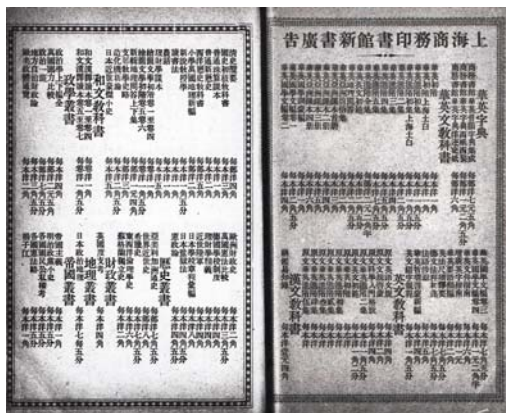
日本で作られた木版が上海でも販売されていた。売っていたのは日本築地活版製造所の上海支店修文書館である。1900年、修文書館は上海から撤退することにし、印刷用品を商務印書館に1万元で一括売却した*18。『伊索寓言』の出版元である商務印書館もそれを使用したことがわかる。

イソップ物語とは関係のない日本猿の挿絵が、なぜ『伊索寓言』にあるのか。注目すべき箇所だ。これこそが『伊索寓言』挿絵の謎を解くための手がかりを提供している。

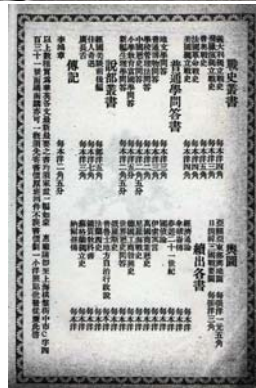
11 『華英進階』の挿絵

『伊索寓言』初版は、奥付によれば光緒二十九年五月とある。五月中のいつかを知るために『繡像小説』創刊号(癸卯(光緒二十九年)五月初一日)の「上海商務印書館新書廣告」(図18)を見る。

華英文教科書の『華英進階』、漢文教科書の



(図18)『繡像小説』創刊号広告(影印本未収録)



『繪図文学初階』は既刊となっている。だが、『伊索寓言』は「続出各書」に分類され定価もついていない。つまり、旧暦五月初一日時点で『伊索寓言』は刊行されていなかった。半月刊の該誌第2期広告では既刊に変更されているから、『伊索寓言』初版は旧暦五月上旬だと考えていいだろう。

その『伊索寓言』刊行よりも前に、商務印書館は教科書のひとつとして英語学習書『華英進階』全5集と国語学習書『繪図文学初階』全6冊を出版していた。

1897年に上海で創業した商務印書館は、キリスト教会関係と商業用書類の印刷を請け負うことから仕事をはじめた。出版業に事業を拡大する転機となったのが英語教科書の編集発行だ。『華英初階』を入門書に、それを発展させた読本として『華英進階』を刊行することにより商務印書館の経済的基盤は確立された。それくらいに売れ行きがよかったという。

私がこの英語読本に注目するのは、それらが挿絵を収録しているからだ。

『華英進階』初集は、甘永龍校訂、丙午年(1906)正月初版 / 1917.5三十一版とあるらしい*19。

だが、重版本にある奥付の初版日付は信用できない。なぜなら、同論文において『華英進階』初版について「1905年初版 / 1917年36版」(125頁)というものも紹介しているからだ。一般に、その刊行年は1898年ということになっている。創業直後の1898年が事実に近いだろう。ただし、分冊で刊行されたから一括で1898年出版というわけでもなさそうだ。

刊行月日の正確な数字は把握するのがむづかしい。教科書は消耗品として扱われるから保存されることが少ない。

影印本で入手した『華英進階全集』(入門、初集から5集まで。上海・商務印書館1904。出版社刊年不記<BiblioLife, 2015.9.25>)を使用する。元本の刊年については、やはり前出『繡像小説』の自社出版広告が手がかりになる。

くりかえせば、『伊索寓言』刊行以前にすでに英語読本『華英進階』全5冊、国語教科書『絵図文学初階』全6冊、英漢対照読本『華英国学文編』2冊までは出版されていた。『商務印書館華英字典』(1902年旧暦二月)の広告に、『華英進階』初集から伍集および全集が掲載される。それまでに刊行を完了したとわかる。

張英が1900年6月15日付『申報』の広告を示している*20。そこには、『華英初階』『華英進階』が見える。それらの英語教科書は、『伊索寓言』の刊行よりも前だということさえわかればよい。

『華英進階』3集(後版で1903(図19))に興味深い挿絵がある。別に示す(図は1904年全集影印本を使う)。

ひとつは題して「ふたりの男と熊 THE TWO MEN AND THE BEAR. 二人与熊」(図20)だ。挿絵は、ウィリアム・スモール(William Small, 1843-1929)画。

同じ寓話だが本文の異なるものが、タウンゼ



(図19)『華英進階』3集 孔夫子旧书网より引用



(図20) 3集第129頁

(図21) 林訳第11丁オ

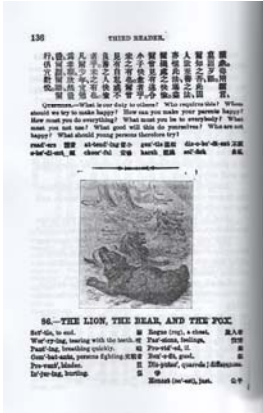
ンド300絵50本は49頁に収録される。ただし、表題は“THE BEAR AND THE TWO TRAVELLERS.”。こちらには、挿絵がない。

男ふたりが熊に遭遇し、ひとりには木に登って逃げた。もうひとりには死んだふりをした。熊は横になった男をかぎまわったあと去って行った。木から降りてきた男が、熊はお前に何をささやいたのかと問う。答えて、友を見捨てるようなやつと一緒に旅をするんじゃない、とな。不幸は友人の親しさを試す。現代日本において、熊に出会ったら死んだふりをしろ、という形になって残っている、という指摘がある。

『伊索寓言』第11丁オの挿絵(図21)と同一だ。

もうひとつは「ライオン、熊と狐 THE LION, THE BEAR, AND THE FOX.」(3集136頁 図22)である。この挿絵はすでに説明した。『伊索寓言』

第36丁ウ(図6)に収録している。前出(図5)の英語原本からではなく、この『華英進階』から引いているとわかる。



(図22) 3集136頁



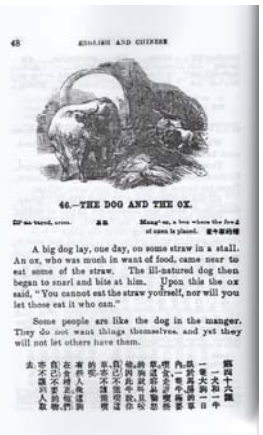
共通する挿絵を『華英進階』(全集影印本)、『伊索寓言』(影印)の順で並置する。



(図23) 初集29頁



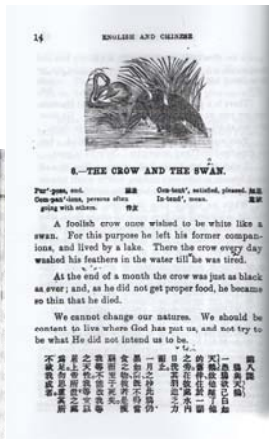
(図24) 林訳第19丁才



(図25) 初集48頁



(図26) 林訳第11丁ウ



(図27) 2集14頁



(図28) 林訳第9丁ウ

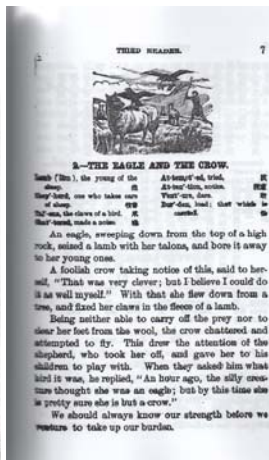


(図29) 2集97頁



(図30) 林訳第25丁ウ

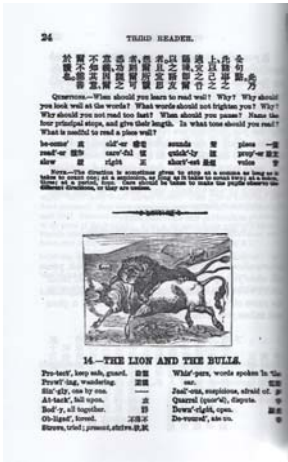
(3集118頁と図が重複する)



(図31) 3集7頁



(図32) 林訳第58丁才



(図33) 3集24頁



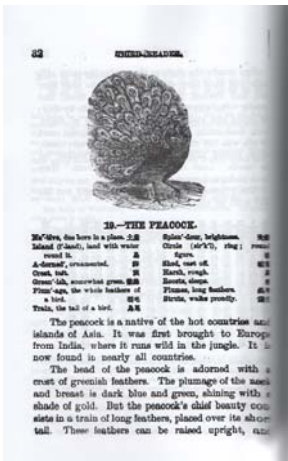
(図34) 林訳第51丁才



(図39) 4集17頁



(図40) 林訳第23丁才



(図35) 3集32頁



(図36) 林訳第48丁才



(図41) 4集109頁



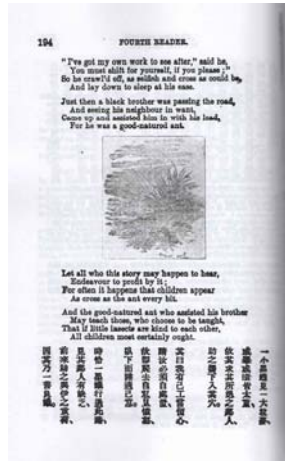
(図42) 林訳第12丁才



(図37) 3集73頁



(図38) 林訳第59丁才



(図43) 4集194頁



(図44) 林訳第4丁才

以上のことから次のことが判明する。『伊索寓言』のいくつかの挿絵は、ウイア、スモール

の原本から直接引用したのではない。この『華英進階』から採取してきた。

挿絵の謎を解明する時に近づいた。

別の書物から引用してきた挿絵をもうすこし紹介する。

英漢対照の読本『華英国学文編 ANGLO-CHINESE ROYAL SECOND READER』巻2(商務印書館1922/初版は1903以前)だ。『繡像小説』創刊号広告に記載されるから『伊索寓言』よりも前の刊行である。

雄ライオンを後ろから描いた挿絵(図45)を見てほしい。これはイソップ寓話とは関係がない。単にライオンについて説明した文章に添えただけ。



(図45)『華英国学文編』 (図46) 林訳第45丁才
巻2 孔夫子旧書網より引用

『伊索寓言』の原話は「ブヨとライオン THE GNAT AND THE LION.」。『伊索寓言』第45丁才(図46)には、ライオンの姿を描いた挿絵が必要だと編集者は考えたのだろう。『華英国学文編』からそれらしいものを見つけて引いた。挿絵は、寓話の内容を表現したものではない。だいいちタウンゼンド300絵50本には該当する挿絵そのものがもともと存在しない。

以上を見れば、『伊索寓言』に収録する挿絵は、イソップ寓話に関係するかどうかにかかわらずほかの印刷物から引用していることがわか

る。ここでいう引用とは、商務印書館内部で使用した木版を『伊索寓言』に借用したという意味だ。

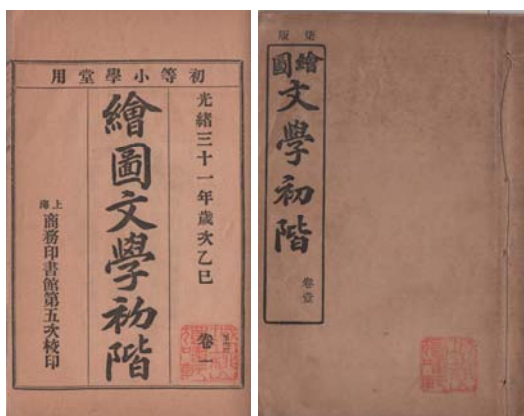
つぎに同じような例を紹介しよう。

12 『絵図文学初階』のばあい

杜亜泉編『絵図文学初階』全6冊は、汪家熔(2008)*21によれば初版は「1902年夏」だそう。実物の写真を見れば、巻1には光緒二十七年(1901)年五版がある。刊行はもう少しさかのぼるとわかる。

1903年、小谷重、雨山長尾楨太郎らが日本から上海商務印書館編訳所にやってきた。最初の仕事は、中国の児童向け教科書を編集することだった。日本人の参加したこの『最新国文教科書』シリーズが1904年に出現するまで、この杜亜泉編『絵図文学初階』は重版をくりかえしている。商務印書館にとっては、主力教科書のひとつだった。木版も活版に並行して刊行されている。

架蔵のものと孔夫子旧書網で見たものを一覧表にする。



(図48) 扉 (図47) 表紙

『絵図文学初階』 架蔵(印)の活版を先に示す。次行以下は孔夫子旧書網掲載。木版と活版の2種類がある。

巻一 光緒三十一年二月二十日五版 表紙は七版
光緒二十七年歲次辛丑 第二次刊印 孔夫子

旧書網

光緒二十九年歲次癸卯十月第一版 / 光緒三十二年歲次丙午四月十三版 孔夫子旧書網 挿絵は架蔵と同じ

光緒三十年歲次甲辰第六次刊印 / 奥付 光緒三十年五月六版 孔夫子旧書網 挿絵は架蔵と同じ

卷二 光緒三十一年四月十二日八版
 卷三 光緒三十一年四月二十日八版
 光緒二十九年十月初版 / 光緒三十二年二月十一版 孔夫子旧書網 挿絵は架蔵と同じ

卷四 光緒三十一年四月二十日七版
 光緒二十八年歲次壬寅 第二次刊印 孔夫子旧書網 挿絵は架蔵と同じ

光緒三十一年二月二十日六版 孔夫子旧書網
 光緒二十九年十月初版 / 光緒三十二年正月九版 孔夫子旧書網

卷五 光緒三十一年二月二十日五版
 刊年不記 孔夫子旧書網 木版 挿絵は架蔵とほぼ同じ

光緒三十二年三月八版 孔夫子旧書網

卷六 光緒三十一年二月二十日五版
 光緒三十年二月五版 孔夫子旧書網 木版
 光緒三十一年十一月七版 孔夫子旧書網
 光緒三十年歲次甲辰十一月初版 / 光緒三十二年歲次丙午四月十版 孔夫子旧書網 挿絵は架蔵と同じ

重版の途中で挿絵を変更することがある。変更するといってもまったく異なる絵柄ではない。印刷技術上の制約のためか簡易木版を使用していたところをより精密な木版に変えた。そういう変更だ。

例として巻5の木版本(図49)と活版本(図50)の挿絵を並べる。内容は「ふたりの男と熊」であり、挿絵も図柄は同じだ。ただし、木版の精度が異なる。活版本は、『伊索寓言』第11丁オにある挿絵と同一だ(図21)。『絵図文学初階』は、ロシアの物語に変更する。『伊索寓言』と内容はほぼ同じだが、文章が異なる。漢



(図49) 木版本



(図50) 活版本

訳者が違うからだ。

ほかにも『伊索寓言』の挿絵と一致するものがある。(図26)(図44)は比較のためにもう一度示す。



(図51) 卷1第23丁オ



(図26) 林訳第11丁ウ



(図52) 卷2第31丁ウ



(図53) 林訳第51丁ウ



(図54) 卷3第6丁ウ



(図55) 林訳第24丁オ



(図59) 林訳第15丁オ



(図56) 卷3第21丁ウ



(図44) 林訳第4丁オ

が使った。

さがせばもっとあると思う。上の例を見るだけで『伊索寓言』の挿絵がどういう種類のものか理解できる。

林訳に添えられた挿絵は、主として商務印書館が所蔵する各種刊行物から借用した。たしかにイソップ寓話に使用されたものも含まれる。だが、イソップ寓話の単行本そのものかどうかはわからない。さらに、挿絵にはイソップ寓話とは無関係のものもある。市販の印刷用木版の一部だったりする。

13 そのほかの挿絵

あと数枚のウィリアム・スモールによる挿絵を提出してここは終了としたい。

THE FAVOURITE BOOK OF FABLES / ÆSOP, OR ÆSOPUS LONDON: THOMAS NELSON AND SONS, 1890 (フロリダ大学公開 電字版)である。

イソップ寓話の書物だから、『伊索寓言』はそのほかの挿絵もここから利用すればいいようにも思う。ところが、一部が一致するだけにすぎない。73頁の「旅人と熊」(図68。ウイア画の模写。省略)は、『伊索寓言』第11丁オの挿絵(図21)とは異なる。

つまり、一致する挿絵があるからといって上



(図57) 卷5第24丁ウ



(図58) 卷6第38丁オ

『絵図文学初階』の図57と図58は、同じ挿絵を別の巻に重複させて掲載する。同じ寓話だが文章が異なる。その挿絵を『伊索寓言』(図59)

ご覧いただきたい。そうだった主な原因は、重版の際に挿絵を追加したからだ。



(図70) 初集23頁



(図71) 林訳第13丁才



(図72) 2集22頁



(図73) 林訳第14丁才



(図74) 2集90頁



(図75) 林訳第4丁ウ差し替え

挿絵 重版に見る追加と差し替え

重版で増やした挿絵を掲げる。そのうちの1点は別の挿絵に差し替えた。

(図76) 林訳初版



共通する挿絵を『華英進階』(全集影印本)『伊索寓言』重版の順で並置する。

3話ともに同じイソップ寓話だ。訳者が違うから両者の漢訳も異なる。林訳「兎と亀」の挿絵は初版では(図76)だった。初版とは大きさが違い小さくなった(図75)ため本文の行も移動したのだ。

15 結論 本文と挿絵は無関係

今まで研究者たちは、『伊索寓言』について本文と挿絵は分離不可能だと考えていた。挿絵をとまなう漢訳の底本をさがすばあいの鉄則だ。両者が一致する原書があるはずだ、と研究者たちはそう信じて探索しつづけてきた。だが、『伊索寓言』に限って、そう考えるのは間違いである。底本問題を解決することができなかったのもしかたがない。

本稿で明らかにしたのは、つぎの事実だ。『伊索寓言』の漢訳本文とそれに添えられた挿絵は、もともと関係がない。ゆえに一致する原書などあるはずがない。

本文から挿絵を切り離せば底本を特定することができる。

タウンゼント本には主として2種に分かれることは述べた。収録する寓話の数が異なる。300話本(さらに絵50点本と絵114点本に分かれる)と350話本だ。編集の違いで結果として、3種類が存在する。

結論をのべる。

『伊索寓言』初版の底本は、タウンゼンド300絵50本 REV. GEO. GYLER TOWNSEND, M.A. *THREE HUNDRED ÆSOP'S FABLES.* (WITH FIFTY ILLUSTRATIONS BY HARRISON WIER) LONDON: GEORGE ROUTLEDGE AND SONS, 刊年不記(1867?)である。

その理由は、つぎのとおり。

比較対照すると寓話の本文と配列がほぼ一致する(別表で両者を対照したものを示す。次号掲載)。

1例をあげる。本稿において目印に指定したタウンゼンド300絵50本最後尾188頁の寓話 THE BRAZIER AND HIS DOG.だ。『伊索寓言』も同じく最後尾に配置している。タウンゼンド300絵114本が順序をずらし前に移動させて88頁であるのとは異なる。

つげくわえると、タウンゼンド350本では、収録寓話数がかけ離れてしまう。

『伊索寓言』全300話は、全313話を収録するタウンゼンド300絵50本のうち、最終的に合計13話を省略して成立した。

底本を特定したうえで『伊索寓言』の本文を見れば、いくつかの疑問が生じる。

タウンゼンド300絵50本にはもともとからついている各寓話の表題が、林訳にないのはなぜか。

たとえば“THE LION AND THE MOUSE.”は「ライオンと鼠」だ。林訳は無題である。前述の顔瑞芳はそれに「鼠報獅恩」とつけ、庄際虹は「獅獲鼠報」とした。

林紓たちは、タウンゼンド300絵50本にもとづき全313話をその順序通りに漢訳しただろう。わざわざ入れ替える必要がない。

その時、表題も当然ながら漢訳したと私は考える。のちにラム『シェイクスピア物語』を『吟辺燕語』と題して漢訳した際には、漢字2文字で表題をつけたことからそう推測する。イソップ寓話だけ、わざわざ表題を省略する理由が不明になるからだ。

寓話の表題を略し、順番を入れ替えたのは誰か。

商務印書館編訳所の担当編集者しかいないだろう。

『伊索寓言』の挿絵は、なぜ底本のタウンゼンド300絵50本所収のウイア画ではないのか。

北京に居住する林紓たちは、イソップ寓話の漢訳原稿を上海の商務印書館に送付した。だが、挿絵を収録した原本は送らなかつた。そう考えるのが合理的だ。出てきた『伊索寓言』の挿絵が異なっているからわかる。もうひとつ言えば、林紓は商務印書館の編集者に底本が何であるのかを知らせなかつた。

商務印書館の編集者は、林紓たちの漢訳原稿を受け取ってどうしたか。

寓話集だから挿絵を挿入しようと考えた。底本がタウンゼンド本であることを知らないから、上海で原書を探さなかつたようだ。編集者は、独自の判断で自社の各種刊行物から適当だと判断した挿絵を拾い集めて関連のありそうな箇所には挿入配置した。当時上海で市販されていた印刷用木版も一部を利用した。

タウンゼンド300絵50本は、前述のとおり全313話を収録する。林訳はそのうちの合計13話が未収録である。

表題を省略し、寓話の順序を変更し、挿絵を選択したのは、商務印書館の編集者である可能性が高い。

ならば、合計13話を没書にしたのも編集者だろう。底本にしたタウンゼンド300絵50本がその箇所だけ破損していたとは考えられない。ページが破損していれば奇数頁と偶数頁になる。だが、実際は底本の172頁全部と173頁の上半分に掲載されている寓話が削除されている。ページの途中から破損されていたはずがない。そのほかも寓話をとびとびに間引いているのだ。削除に関与したのは、やはり商務印書館の編集者だ。

『伊索寓言』重版になるとさらに寓話の順序

をかえ、挿絵を増加させ、一部を別のものに差し替えた。林紘たちとは無関係にそれができるのは、やはり商務印書館の編集者しかいない。ただし、それを証明する直接の資料は今のところ見つからない。

最後に、『伊索寓言』刊行後、商務印書館が編集発行する『最新国文教科書』に本文が使われていることを紹介する。 罍

【注】

- 1) 胡從経「《伊索寓言》在中国」『晚清児童文学鈞沈』上海・少年儿童出版社1982.4
- 2) 鮑延毅「可貴的求索 斐然的成績 林紘訳述《伊索寓言》試評」『山東師大学報(社会科学版)』1991年第3期 1991.6.30。陳錦谷編輯『林紘研究資料選編』上冊 福建省文史研究館編2008.6
- 3) 王輝「翻譯与救国：林訳《伊索寓言》析論」『英語研究』第9巻第1期 2011.3
- 4) 衛未「林紘、周作人的翻譯辨析 《伊索寓言》為例」『院校平台』『名作欣賞』2014年第23期 2014.8
- 5) 馮維維「林訳《伊索寓言》改寫研究」『安陽工学院学報』第14巻第1期(総第73期)2015.1
- 6) 黄幼嵐「從目的論視角看林紘児童文学翻譯 以《伊索寓言》為例」(『泉州師範学院学報』第33巻第1期 2015.2 電字版)
- 7) 蘇建新「也説林紘伊索寓言的原本何在」『清末小説から』第122号 2016.7.1
- 8) 呂維維「《伊索寓言》訳本比較閲読」『中華読書報』2015.8.5 電字版
- 9) 韓嵩文(MICHAEL HILL)「“啓蒙読本”：商務印書館的《伊索寓言》訳本与近代文学及出版業」王徳威、季進主編『文学行旅与世界想像』南京・江蘇教育出版社2007.4。図4点。ほかに次の論文がある。
韓嵩文(MICHAEL GIBBS HILL)「帰化翻譯的界限 以林紘《伊索寓言》訳本為例」『東亜人文』第1輯 北京・生活・読書・新知三聯書店2008.10 電字版。これは上の“啓蒙読本”……とほぼ同文。
MICHAEL GIBBS HILL, LIN SHU, INC. *Translation and the Making of Modern Chinese Culture* OXFORD UNIVERSITY PRESS 2013。図4点。これについては次の書評がある。崔文東「【書評】Michael Hill《林紘文字製造廠》」CCSA “Talk to the Author” 第2期 2013.2.19 電字版。また、張治「林訳小説作坊的生産力」『上海書評』『東方早報』2013.3.24 電字版。さらに、Michael Hill 著、劉蘊芳訳「Michael Hill《林紘文字製造廠》作者自叙」CCSA “Talk to the Author” 第2期 2013.2.18 電字版
韓嵩文(MICHAEL GIBBS HILL)「帰化翻譯的界限 以林紘《伊索寓言》訳本為例」彭小妍主編『文化翻譯与文本脈絡 晚明以降的中国日本与西方』(台湾・中央研究院中国文哲研究所2013.7 中国文哲專刊43)収録。図4点。林訳の底本は見つけることができないままになっている。
- 10) 沢本郁馬「孫毓修『伊索寓言演義』の底本」『清末小説から』第122号 2016.7.1
- 11) 内田慶市「3・林紘の『伊索寓言』(1903)」『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学出版部 2001.10.25 関西大学東西学術研究所研究叢刊17。136-139頁。143頁の注3で次のように書く。「関西大学増田文庫蔵本は初版(光緒29年5月首版と奥付にあり)であり、また表紙に「畏廬先生手贈」と墨書された貴重なものである。」「全部で295話話を収める」(136頁)と書く。295話ではなく300話が正しい。底本への言及はない。表紙の墨書については本文で述べる。
- 12) 影印は次の書物に収録する。内田慶市『漢訳イソップ集』ユニウス2014.2.28 文化交渉と言語接触研究・資料叢刊3。書評がある。萩野脩二「野心的な資料集」『東方』第402号 2014.8.5
- 13) 増田渉著、伊藤漱平編『雑書雑談』汲古書院 1983.3.10
- 14) 中島、高宮については『東亜先覚志士記伝』下(原書房1974.10.25復刻)による。
- 15) 三宅興子「イソップ寓話における図像の移植とその日本化 『通俗伊蘇普物語』と「金の斧 銀の斧」を題材として」川戸道昭、榊原貴教編著『図説翻譯文学綜合事典』第5巻日本における翻譯文学(研究編) 大空社、ナダ出版センター2009.11.24
- 16) 樽本照雄『漢訳アラビアン・ナイト論集』清末小説研究会2006.6.1

- 17) 復刻版で谷川恵一は「解題」244頁において、タウンゼントを Fyler Townsent と 2カ所で誤植する。
- 18) 樽本照雄『初期商務印書館研究(増補版)』清末小説研究会2004.5.1。関連する文章がほかもある。板倉雅宣「上海新報と修文書館について」、高網博文「上海新報と日本人コミュニティー」、孫安石「上海新報と日本の外務省」、以上「近代中国における日本人経営の新聞の研究」神奈川大学非文字資料研究センター・ニューズレター『非文字資料研究』33 2015.1.31 電字版
- 19) 張英「商務印書館早期編印英語教材初探」『清末小説』第26号 2003.12.1。123頁。私の所蔵する複写は、1921年5月七十七版。
- 20) 張英『啓迪民智の鑰匙 商務印書館前期中学英語教科書』上海・中国福利会出版社2004.3。66頁。張英「《華英初階》和《華英進階》何時出版? 商務印書館早期英語教科書再探」『清末小説から』第74号 2004.7.1
- 21) 汪家燾『民族魂 教科書變遷』北京・商務印書館2008.3。51頁
- 22) ほかに、郭延礼「中国近代伊索寓言的翻譯」(『清末小説』第19号 1996.12.1)に言及がある。60頁「1903年9月(光緒二十九年八月)商務印書館初版印行」298則。61頁「我見到的為光緒三十二年(1906)九月商務印書館再版本」また、彼の注10で英文本について次のように書いている。「英文本《伊索寓言三百篇》(“Three Hundred Aesop's Fables”), 中国上海商務印書館1927年版」(64頁)。これと林訳の本文を比較対照したという。ここは説明不足だ。林訳は1903年刊行であるにもかかわらず、ずっと後の1927年版英文本と比べる理由を述べていない。なんでもいから比較すればよいというものではない。該文は、郭延礼『中国近代翻譯文学概論』(漢口・湖北教育出版社1998.3/修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第二版第三次印刷)に収録された。

〈女禱机〉 罕見林譯研究資料

古 二 德

民國2年(1913年)7月16日由中華雜誌社與順天時報印字局(別名為“順天時報印字館”)發行了一本政治雜誌,以《中華》為名(英名:CHU HUA),安排一月兩冊。根據劉揆一(1878年-1950年,當時支持袁世凱)所寫的〈中華雜誌發刊詞〉,“民國二年春二三同志痛不黨論之黨論充塞仁義於是中有中華雜誌之作”(第二頁)。刊末附有英國小說〈女禱机〉一章,並附有序文,林紓筆述,力樹護口譯——但因7月底中華雜誌社已歇業,此譯乃停止發行。因此資料不足,無法鑑定其林譯的原著。¹目前《中華》雜誌罕見,筆者祇能發現兩冊:一冊保存於北京大學圖書館(索書號為6695/J),二冊藏於北京雜書館私立圖書館。由此,〈女禱机〉林譯未受到足夠重視,況且林紓編寫的〈序〉,雖提及中國人權問題,但從未發表過。本文目的在於抄錄〈女禱机〉譯書序文及附加此譯書的第一章。此外,筆者亦提供口譯者力樹護的身份資料。

¹ 雖林譯發行未完,但有可能林紓繼續翻譯二三章節,或者譯完,後成為未刊文獻。之所以如此,是因為自完譯至發譯需要一段時間,兼之〈女禱机・序〉中林紓指出該書“譯成”才“命曰禱机”(頁2)。今未刊林紓文獻藏於北京國家圖書館古籍館,但1995年馬泰來參觀此館時,未見〈女禱机〉一書(馬泰來私人通信,2014年6月底及12月3日)。筆者通知此館時,未得答复。

力樹護身份

生於福建省永福鎮，力樹護與林紓合譯三種小說：《情窩》，1912年11月1日-1913年9月30日刊於《平報》，原著不明；偵探小說《羅刹雌風》，1913年4月25日-8月25日刊於《小說月報》第4卷第1-4期，Headon Hill 原著者，原著為《A Hair's Breadth. A Novel》（紐約，1897年）；《女禱机》，1913年7月16日刊於《中華》第1冊，原著不明。除刊於該段時間外，力樹護沒有編寫任何作品。其名如此湮沒於無聞。

關於力樹護身份，證據不足，但依林紓暮年弟子朱義胄所記載，力樹護表字乃是次東，曾為林紓學生。²由此可證，力樹護為力鈞（1855年-1925年）的兒子。根據鄭孝胥日記，1911年1月20日晚上“有醫學生力次東來訪，乃力軒舉之子”。³力鈞，字軒舉，號醫隱，福建省永福人，“以精於醫理知名”⁴，有兩個兒子：嘉樂及樹護，均學醫。⁵力鈞與林紓交友許多年，早於1909年11月14日兩人與郎溪、陳杰士造訪嚴復，⁶何況自1911年3月至4月又與鄭孝胥，陳璧，陳衍等相見。⁷同年，力鈞、林紓兩人因辛亥革命爆發而避居天津，此時力樹護於林紓指導下始學而譯書。 罍

《女禱机·序》抄錄

古者男女均無所謂權。言網以攝之。言禮以防之。⁸或遏抑過甚。後世遂有求伸女權之說。與男子抗。實則其事不始於中國也。波斯者回教也。⁹其視女界之賤。謂濁穢之軀。不能躡天上清虛之府。貴要之妻妾。出必納之箱櫃。不令人見。其視巴黎之風尚。至云女子敢於百葉窗中。外窺男子。其為去禮而潰防至矣。孟德斯鳩曾譯波斯俞士白之語。¹⁰著為成書。則當日巴黎雖已文明。似仍未講女權也。近二十年以來。英倫始大昌女權。並求參政。要脅政府。肆擾闔閭。至今未已。其甚者。乃如書中之所云。累嫁而戕其夫。求母一國。凡所交遊。均國務之卿。五等之爵。少忤其意。即加陰害。蓋謂挾多金。但足以聳貪夫。不足以動智士。惟恃其殊色。則天下雄奇男子。亦將被其迷惘。一時英傑之士。果扶服其長裙蠻鞋之底。聽受號令。雖敗名戕身無恤也。嗚呼。此謂之女變女禍。非女權也。著是書者。為英人。似有慨而言。不必盡有其事。然非有肇其端者。言且弗肖。吾恐其禍變。且灌入於吾國也。幸吾國秉先哲之教。或不淪放至此。譯成。命曰禱机。¹¹亦欲聞者知誠也。

中華民國二年六月蠡叟林紓敘

² 朱義胄，《林氏弟子表》，世界書局，上海，1949年，頁7。又參曾錦漳，〈林譯小說研究（上）〉，《新亞學報》，第7卷第2期，1966年9月1日，頁258。

³ 鄭孝胥，《鄭孝胥日記》，中華書局，北京，1993年，第3冊，頁1303。

⁴ 高拜石，《新編古春風樓瑣記》，正中書局，台北，2002年，第1冊，頁155。

⁵ 郭富小，〈近代著名醫學家力鈞〉，《福建史志》，第1期，1987，頁44-45。

⁶ 王杖主編，《嚴復集》，中華書局，北京，1986年，第5冊，頁1497。嚴復日記曰：“琴南、軒舉、郎、杰四人請客”。筆者認為郎、杰提郎溪、陳杰士。

⁷ 張旭，《林紓年譜長編》，福建教育出版社，福州，2014年；鄭孝胥，《鄭孝胥日記》，第3冊，頁1313及1316。

⁸ 凌廷堪（1757年-1809年）於〈荀卿頌并序〉說道：“夫人有性必有情，有情必有欲。故曰：飲食男女，人之大欲存焉。聖人知其然也，制禮以節之，自少壯以至耆耄，無一日不囿於禮而莫之敢越也。制禮以防之，自冠昏以逮飲射，無一事不依乎禮而莫之敢潰也”（收集於《校禮堂文集》，未註明日期的線裝古舊書本，卷10，頁1）。

⁹ 林紓認為孟德斯鳩（Montesquieu）《波斯人信札》（*Lettres persanes*, 1721年初版）其中兩個波斯人所寫的通信為真實，不過孟德斯鳩乃以波斯宗教習慣的虛構描述為批評法國社會。1915年林紓與王慶驥始譯該書，譯名為《魚雁扶微》。

¹⁰ 俞士白為 Usbek。

¹¹ 司馬遷，《史記·五帝本紀》：“顓頊氏有不才子，不可教訓，不知話言，天下謂之禱机”（中華書局，1963年，上海，第1冊，頁36）。

女橋札

水稲力樹 著 林野 譯

第一章

吾於此書。隨事記述。初無成心。第恐此書出後。將累顯人之名譽。故不敢徑逐書之。今茲悉諱其地與人。唯事遂爲今人所知。一望已知爲是。而登即記者。於是書中。亦微有僞題。國中偵探家。當時會屬余探此奇女。彌貞黎英之蹤跡。今吾書更出。似涉嫌疑。今幸爲時已遠。當時在事之人。均已物故。不妨着爲成書。示天下以奇事。今當告讀者。此奇女爲余所知。且蹤跡至密。私體其能。至此女。快過範圍以外。是皆其人。富有奇才異能。故成此種種離奇之罪孽。方余未識此女之先。乃久聞此女之名。初不以爲得一奇常之美人。不知此人。乃似機敵馬力中之總輪。爲狀雖小。而大輪悉隨之。體動則。則殊令人不可得解。外間述此奇女。似浮雲霧之中。迷離不可捉摸。吾初以爲警言耳。當日國務員。咸言此女至有能。力有內務。轉者。爲此女顛倒。主其心。爲之傀儡。尤有一親貴。竟受侮弄於股掌之上。且有一國王。當困厄之際。此女竟救出之。艱危之中。意大利有子爵。曾與此女締結。久乃自戕。吾非欲力證此傳述之言。但述其已所親聽者。告諸天下。俾共知女界中。固有不勝防者。亦不可不爲之備。當余未晤此女時。曾於相片中。極觀玉容。固以絕色傾天下也。其在德國博覽會中。冷巴畫師。曾繪其容。高懸於第一日。接深信天下同無一人。

小説 女橋札

能喻其美者。一日有人告余。海而曼夫人所訂球會中。此女必說。余大悅。願亦不致以纖細之手。描繪其美。即使國中。之名畫。及雕刻諸名手。恐亦無能狀其秀麗。其人非頗非。修短合度。讀者試觀冷巴畫像。更於意外。增以萬倍之想。方能得之。此女眼波。似睡非睡。秀麗人。骨肌。膚。則如乳。參以玫瑰之露。絳縵。翠。朱。唇。之。絳。逾於玫瑰。媚態。殆古美人所無。而一段精華。見即射人。人。匪不爲所動。方其靜坐之時。遠觀之。似埃及。禪定之尼僧。及其一笑。則又立欲其帶。應及其發言。則書中所記古才女。不備測也。人。苟入其。突。中。則百。醜。畢。露。欲。快。其。羞。而。自。逐。殆。萬。無。解。脫。之。時。惟。引。怕。自。戕。靡。靡。魂。魄。矣。此。女。商。標。六。國。之。言。無。殊。於。士。著。工。道。與。難。如。畫。法。尤。佳。凡。科。學。政。治。二。家。見。者。咸。稱。神。對。且。洞。中。曾。舉。果。是。人。生。於。十五世紀中。必王。一國。惟。在今。日。外。爲。放。債。之。女。家。陰。爲。社。會。之。盜。賊。外。人。咸。言。此。女。十八歲時。已。錄。一。富。翁。歷。史。無。稽。不。敢。證。實。其。事。出。身。爲。咖啡。館。之。歌。女。有。銀行。家。彌。貞。者。悅。之。一。禮。拜。中。即。娶。之。而。去。逾。一。禮。拜。彌。貞。自。盡。矣。所。有。數。百。萬。之。巨。產。悉。歸。此。女。自。是。日。起。遂。稱。彌。貞。夫。人。脫。離。咖啡。館。改。者。之。籍。成。爲。富。貴。之。婦。離。握。其。主。動。之。輪。軸。使。社。會。中。巨。輪。咸。隨。之。而。動。無。論。男。女。咸。被。玩。弄。即。國家。之。命。脈。亦。在。彼。掌。握。中。如。狸。狌。之。弄。鼠。有。歌。姬。阿。尼。柏。者。以。能。歌。名。一。國。彌。貞。忌。之。立。敗。其。譽。復。得。醫。生。以。能。醫。名。一。近。此。人。亦。發。槍。口。刃。高。斯。湯。者。富。翁。子。也。以。計。見。陷。壯。年。伏。法。山。讓。奧。者。當。世。之。政。治。家。也。亦。因。其。人。論。替。終。身。所。犯。罪。惡。豈。復。大。於。元。兇。之。所。及。今。日。述。余。彌。貞。夫。人。相。見。之。時。在。海。而。曼。夫。人。球。房。中。第二。次。

小説 女橋札

跳舞時。彌貞夫人過余前。步武與琴聲。應節合度。與之同舞者。爲侯爵且斐豪。侯爵年少而富。已與倫敦中。最美之。郭。麗。斯。敦。女。士。爲。婚。及。舞。罷。有。人。介。紹。見。彌。貞。夫。人。余。請。曰。今。夜。願。得。奉。侍。夫。人。一。舞。夫。人。流。目。盼。余。余。顧。舞。幾。不。知。胸。中。之。爲。寒。爲。燥。也。夫。人。謂。余。曰。勞。斯。先。生。吾。未。嘗。爲。人。乍。見。而。唐。突。冒。語。如。先。生。意。願。重。逢。先。生。之。意。請。于。第十。三。次。舞。時。敬。侍。先。生。余。大。感。謝。靜。候。夫。人。命。令。然。爲。時。與。耳。私。自。騰。舞。借。近。天。人。乃。不。知。已。自。引。而。即。于。危。地。至。第。四。次。舞。時。余。與。郭。麗。斯。敦。女。士。同。舞。女。士。年。少。可。十。六。七。美。心。美。意。心。存。二。侯。爵。余。雖。與。同。舞。情。趣。然。非。時。神。韻。天。然。此。次。顏。色。頗。異。似。有。感。觸。使。使。弗。樂。舞。竟。與。余。同。坐。樹。之。下。女。士。謂。余。曰。勞。斯。先。生。吾。有。奉。命。之。事。欲。回。迪。克。之。事。迪。克。者。所。管。侯。爵。乳。名。也。余。曰。吾。與。侯。爵。同。窗。之。小。友。女。士。曰。然。耶。吾。思。迪。克。漸。來。將。圖。於。險。頗。備。風。其。所。爲。勞。斯。先。生。當。靜。吾。思。吾。至。爲。之。省。省。然。憂。也。語。次。果。欲。淚。已。奪。眶。而。出。女。士。乃。不。知。侯。爵。前。日。輪。局。中。大。負。余。曰。二。不。之。知。但。敦。何。事。至。此。請。以。見。告。女。士。漸。低。其。首。微。語。曰。先。生。乃。不。知。侯。爵。前。日。輪。局。中。大。負。余。曰。二。不。之。知。但。知。侯。爵。有。家。國。傳。進。必。非。所。病。女。士。謂。侯。爵。且。中。落。耶。余。因。靜。候。侯。爵。與。彌。貞。夫。人。同。舞。時。狀。態。方。余。避。思。問。女。士。遂。目。視。余。似。插。余。心。中。所。思。之。事。即。曰。先。生。今。夕。贈。迪。克。乎。余。淺。應。之。女。曰。迪。克。還。來。何。作。余。遂。首。示。以。弗。解。女。曰。已。與。彼。妹。跳。舞。至。四。次。矣。余。爲。不。解。曰。彼。妹。何。人。女。曰。即。彌。貞。黎。英。也。余。創。答。非。答。女。曰。吾。思。迪。克。已。躬。身。于。虎。口。彌。貞。夫。人。累。以。資。假。之。後。乃。不。審。其。何。矣。余。知。此。女。之。言。確。

小説 女橋札

也。復。淺。應。之。女。切。齒。曰。吾。思。必。至。于。彼。嬌。媚。之。音。令。人。聞。之。心。碎。此。爲。余。第。一。次。識。彌。貞。之。能。力。足。以。顯。何。人。如。是。者。即。曰。密。斯。郭。麗。斯。敦。何。爲。以。心。腹。之。言。見。示。女。不。言。久。之。曰。吾。不。自。持。似。中。狂。易。之。病。復。曰。行。也。勞。斯。先。生。爲。我。生。平。誠。懇。之。友。欲。求。助。于。君。我。侯。爵。于。水。深。火。熱。之。間。語。後。玉。容。無。主。又。言。曰。女。子。纖。弱。何。能。有。爲。不。似。男。子。願。力。偉。也。時。音。樂。大。作。語。爲。所。經。遂。不。能。更。談。時。陸。軍。部。中。魏。新。加。請。郭。麗。斯。敦。舞。跳。舞。余。自。人。叢。中。出。而。息。息。方。行。時。有。人。稱。音。首。以。德。腔。作。英。語。曰。爾。獨。不。憶。與。吾。訂。跳。舞。乎。余。何。獨。行。赴。歌。堂。余。驚。覺。視。之。始。悟。曾。與。歌。者。柯。尼。柏。有。確。訂。之。約。因。離。道。不。遠。柯。尼。柏。以。歌。名。天。下。爲。人。所。聘。至。此。尚。未。登。台。爲。余。數。年。來。之。相。識。此。爲。嬌。媚。有。禮。不。惟。歌。喉。佳。也。歌。者。曰。勞。斯。先。生。吾。俸。矣。前。約。當。廢。且。就。辭。處。當。時。諸。事。先。生。尙。憶。海。特。伯。及。孟。德。可。謂。盡。善。余。曰。罷。約。良。佳。遂。同。至。花。宵。中。僻。處。談。心。余。歌。者。搖。擺。體。語。余。語。時。心。中。感。念。侯。爵。及。其。聘。妻。並。與。彌。貞。夫。人。往。來。胸。中。凡。歌。者。所。言。似。不。了。了。忽。聞。柯。尼。柏。曰。試。觀。余。武。外。見。但。斐。豪。侯。爵。與。彌。貞。夫。人。躡。步。同。入。是。間。侯。爵。愕。然。若。喪。而。夫。人。嗚。嗚。似。有。所。說。而。侯。爵。未。承。諾。者。歌。者。耳。語。曰。勿。令。彼。二。人。見。之。余。微。語。曰。竊。聽。人。言。大。屬。非。福。歌。者。曰。此。事。關係。非。少。又。當。別。論。余。曰。爾。何。由。知。其。秘。事。歌。者。曰。此。事。關係。一。生。之。苦。樂。男。子。一。生。之。成。敗。胡。可。不。留。意。聽。之。余。心。奇。其。語。以。爲。侯。爵。沈。迷。及。郭。女。幽。怨。此。歌。者。何。由。知。之。則。亦。靜。聽。其。言。彌。貞。夫。人。方。爲。柔。婉。之。言。曰。但。斐。豪。勿。佛。吾。意。汝。今。專。愛。彼。美。吾。能。使。爾。于。經。月。後。即。忘。其。人。侯。爵。太。息。曰。吾。

小説 女橋札

一 第 一 冊

小説 女權報

一 曰。吾胡不見君。歌者曰。見與弗見。初無係屬。唯助侯爵之約。今夕務之一諾。至第十三次舞時。能否索約。不赴。余不期失色。自念與美人款接。勿論禮所不合。即寸心亦殊耿耿。歌者復連余曰。此事究竟如何。待期至時。且在酒房小飲。即可不踐其約。余曰。素不親飲。惟此時尚思跳舞。人為平日所欲得者。自爾見。嗚呼。歌者曰。即欲取吾一諾。余曰。此諸殊難。且君令我瘦約。又屬何意。歌者曰。少頃自解。今姑聽吾言。因握手而別。時去第十三次合舞之時。尙遠。余尙數面彌貞夫人。及第十三次至余時。余如歌者言。避入酒房。吸菸。自惟為歌者所泥。失此豔福。因思此歌者柯尼柏泥。余見助。又何定策。余素手空空。何能拔侯爵于陷阱。已而侯爵闖入。面含醉意。取酒飲之。久之始見余。即引余手大笑。其狀似狂病新發。曾曰。先生。我有旨奉白。吾今已與鄧禮斯敦女士結婚矣。余曰。此似非君心。侯爵曰。汝謂知吾已與彌貞與萊英夫。人約婚。余曰。寧欲我賀君耶。侯爵曰。欲延君于禮拜一日。為我作證婚之人。余曰。可。侯爵勿勿遂出。是夜。余復過鄧禮斯敦。夫意已極。映映先行。余不更訪歌者。亦隨時散。已逾半。余亦不審柯尼柏之定策。何能拔出侯爵。明日仍聞然不得消息。至禮拜六。余始得書。書來自柯尼柏。書曰。

勞斯先生惠鑒。吾方需財。須假三萬七千鎊英金。金固為吾所有。唯嗚嗚不能取給。今付假款之據。請君為我簽名。

附假資之券

中

即死。亦萬不能會去其人。彌貞夫人曰。此一人之私言。彼意。汝焉知之。侯爵曰。吾不能立易其腦。舊腦存。則鄧禮斯敦亦存也。彌貞夫人曰。愚哉。此吾特為勸誡之詞。語已作巧笑。侯爵則怒目視夫人。似點黑為人所得。反顧其人。思乘間而自脫。因指彌貞曰。爾為魔鬼。夫人曰。吾所要求。在情理之中。非別有所營。侯爵曰。不惟有費。直索吾命。夫人雖有笑曰。汝大善戲騙人。今誠告我。一言決耳。凡爾所沈迷之小玩物。容易棄捐。何為濼戀不已。今爾欲得錢者。是則不。乏。因出鈔票無數。授侯爵。侯爵受之。言曰。此票二萬一千鎊。余聞言。胆慄。而歌者握余臂甚堅。似亦畏懼。此時侯爵面頰微似已搖動。此雖言曰。此錢固足濟我。凡不了之事。皆了之。爾曾假我。一萬五千鎊。矣。彌貞夫人曰。何復言此。是淺淺者。安足。云。迪克汝來。聲發如音樂。且云。此金行息五釐。非飽也。侯爵大息曰。息非以後。彼此成婚。可耳。侯爵太息曰。蒼天教我。內奉還者。能自由否。彌貞夫人曰。果能如是者。聽汝。唯三日以後。彼此成婚。可耳。侯爵太息曰。蒼天教我。今且假我自救。無恤其他。余聞至此。不期起立。歌者尙挽吾臂。吾曰。行也。歌者微笑語余曰。今夕之劇。乃大奇。余曰。爾何言。歌者曰。鄧禮斯敦者。吾友也。彌貞非我友。爾試觀吾策。苟能助余者。則更佳。顧先生果能助余否。余曰。爾我相知。何為言此。吾力果能主。不為盡歌者曰。吾知君善。我即侯爵及鄧禮斯敦。亦君懷心之人。必不忍不加援手。余曰。欲余嗚嗚之間。竟取三萬七千鎊之金。恐不能至。歌者視余曰。勞斯先生不約同彌貞夫人于第十三次跳舞耶。余曰。爾何由知之。歌者曰。若二人訂約。請吾方在旁聞之。余

小説 女權報

五

一 第 一 冊

小説 女權報

時無從措手。即假此資于彼。彼亦不即疑與毒事之有係屬。彌貞夫人之惡。鄧禮斯敦發覺。魔鬼之犯天使。一心欲得府夫人品。既買入親貴之間。但妻妾為彼束縛。離離。仲無可逃。死。亦知侯爵必無所得。資故以資。鄧之猶之。准人和。時立收其。魚又安從。脫者。然乃未計及鄧禮斯敦及我也。我于一閱月中。必能清還其債。時將以吾之定策告之用。表吾能。余曰。柯尼柏柏姑。若以余為之。必不露此機。若彼人。俱而暗殺。一為所。恐無善果。柯尼柏微笑。頗不謂然。余思。此人非彌貞敵手也。明日鄧禮斯敦見余大喜曰。吾不知所報。實非辭。請所能。仲讓。君乃以神力救我。迪克此債。異日。則不。余不。承其勞。但有。撫慰而已。然實不知柯尼柏是否得。日。成。然。用以為。是夕。復過彌貞夫人于鳥里烏。觀其會。夫人語余曰。勞斯先生。吾心所願者。欲得侯爵之。余曰。即得其人。且奈何。夫人變色。以絕。活中。流出。投。言曰。勿論男女。必無全地。余心震。深以柯尼柏為。因曰。夫人。以吾思之。夫人。以絕。好之。翻。光。胡不自。行。藥。乃。仇。及。人。夫人。昨。日。瑋。笑。曰。汝。余。歸。時。枕。席。不。察。知。柯。尼。柏。固。不。敵。彌。貞。而。余。則。自。投。羅。網。矣。

(未完)

中

立信字柯尼柏及勞斯。合券。今以急需之故。向彌貞與萊英夫人。借出英金三萬七千鎊。行息五厘。約一月之內。清還無誤。

余得信。心為霍然。計柯尼柏既任代債之責。余何情此。即立簽付使者。是夜得電。信。自但。妻。妾。侯。爵。家。來。言。午。句。鐘。後。相。見。已。而。侯。爵。至。矣。言。曰。先。生。親。之。此。鈔。票。得。諸。鄧。禮。斯。敦。者。計。三。萬。七。千。鎊。因。繁。繁。述。與。彌。貞。與。萊。英。之。故。並。述。鄧。禮。斯。敦。所。以。授。已。之。故。云。此。策。均。先。生。與。柯。尼。柏。所。定。今。此。巨。款。收。之。義。乎。然。而。余。曰。收。也。侯。爵。曰。然。則。請。君。同。我。至。彌。貞。家。與。之。議。決。余。如。言。以。輕。車。往。彌。貞。夫。人。廷。余。二。人。于。公。園。街。之。私。室。相。見。時。夫。人。謂。余。曰。我。聞。迪。克。訂。于。禮。拜。一。日。為。證。婚。之。人。確。乎。前。日。跳。舞。場。中。背。余。約。單。無。可。逃。今。幸。以。此。動。勞。蓋。其。前。言。余。曰。我。固。專。誠。何。此。命。令。然。而。事。勢。句。而。侯。爵。已。立。出。鈔。票。于。懷。中。余。見。侯。爵。出。鈔。票。時。夫。人。神。色。慘。變。如。日。絲。烟。皆。成。死。灰。如。大。火。猝。想。不。留。餘。語。者。即。向。侯。爵。曰。如。此。見。還。何。以。言。論。余。不。知。所。以。處。置。即。欲。與。侯。爵。既。還。巨。款。收。歸。債。券。可。以。自。由。矣。而。夫。人。忽。引。余。手。至。隔。障。曰。先。生。乃。中。梗。吾。事。請。且。不。測。余。曰。吾。若。自。明。其。無。他。夫。人。能。傾。信。之。否。夫。人。隱。色。曰。吾。不。能。違。釋。此。憾。必。得。吾。仇。然。後。已。時。侯。爵。怒。行。赴。鄧。禮。斯。敦。之。家。余。思。果。能。二。人。訂。合。無。問。者。余。即。振。怒。于。人。亦。無。所。甚。惜。此。時。往。訪。柯。尼。柏。于。跳。舞。場。既。見。即。曰。汝。之。所。謀。我。至。欲。得。其。詳。柯。尼。柏。曰。無。他。但。能。假。資。救。人。而已。此。策。即。定。于。爾。第。十。三。次。跳。舞。之。時。佐。之。者。為。吾。介。爾。吾。若。假。之。他。處。尙。可。得。資。以。一

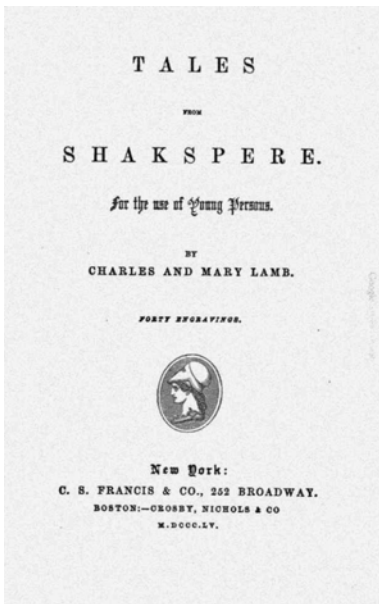
小説 女權報

七

漢訳ラム『シェイクスピア物語』の序 3
「区別がつかない論」再び

樽本照雄

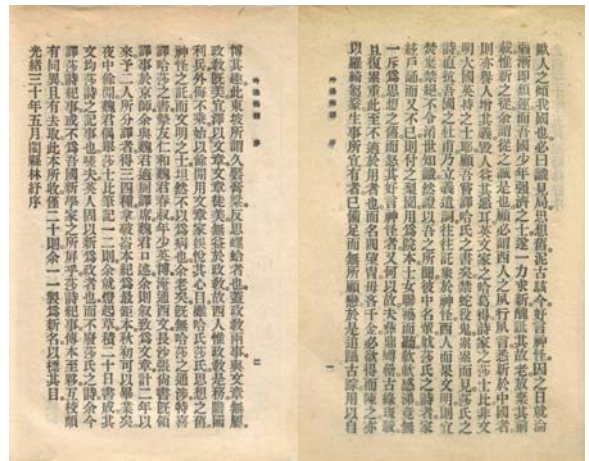
【前号補足】「海外奇譚叙例」に見える Shakspeare は、Shakespeare を間違えたものではない。そう綴る英語書籍が実在する。宋莉華『近代来華伝教士与児童文学的訳介』（上海古籍出版社 2015.11 中西文学文化関係研究叢書）は自著 284頁注1においてわざわざ次のように説明する。「訳者は“Shakespeare”を誤って“Shakspere”とし、訳者が英語をいくらか知っている新式の文人であることを示している（訳者將“Shakespeare”誤作“Shakspere”，表明訳者是一個粗通英文的新式文人）。宋莉華の知識不足からくる誤りだ。『海外奇譚』の漢訳者を貶めている。宋莉華は自分の無知を中国の知識人に投影する研究者のひとりだった。



もうひとつ例をあげる。陳歷明「莎劇最早的漢訳本：《海外奇譚》」（『外国語（上海外国語大学学报）』第39巻第1期 2016.1.20. 88頁）も「叙例」を引用して「是書英国莎士比亞（Shakespeare，千五百六十四年生，千五百一十六年卒）所著」と誤る。陳歷明も原文が間違っていると考えている。だから勝手に書き換える。引用としては正しくない。

『英国詩人吟辺燕語』のばあい

林紓「吟辺燕語序」である。「林序」と称する。

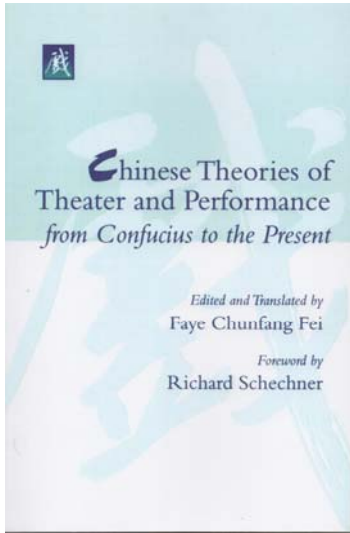


林序

「林序」の記述構造には大枠がある。前半部分でシェイクスピアについて述べ、最後部分はラム本について解説している。この認識が重要だ。「林序」の内容がでたらめだと非難攻撃する研究者はそれを無視して、あるいは知らずに論じている。林紓については何を書いても、どう罵ってもよいと考えているらしい。

参考までにいうと、「林序」全文は、費春放 FAYE CHUNFANG FEI (1999)*28が英訳している(114-116頁)。また、瀬戸博士の日本語訳もある(89-91頁)。

関連論文からシェイクスピアとラムに関係する語句だけを引用して説明する。誤解のないようをお願いしたい。そこに注目するのは、研究



費春放

者の多くが問題にする箇所だからだ。林紓が無知である証拠として示されるのが常となっている部分である。順に検討していく。

ハガードと並べる

英文家之哈葛得。詩家之莎士比。

英国作家のハガード、詩人のシェイクスピア

ハガードは小説家だ。シェイクスピアの「詩家」は詩人でよい。莎劇(詩)なのだから。林紓にとって英国人のふたりともが作品を通して親しい存在だった。

費春放はここを英訳して奇妙なことにしている。

【費春放】Hardy and Shakespeare literary giants p. 114

文学の巨人ハーディとシェイクスピア

ハーディはトマス・ハーディ(Thomas Hardy, 1840-1928)だろうが、それがなぜ哈葛得の英訳になるのか。だいたい林紓はハーディの作品を翻訳したことがない。費春放は、別の

箇所でも同じくハーディと誤訳している。ハーディの漢訳は哈代だ。費春放には林訳ハガードについての知識がないらしい。また、原文の「文家」と「詩家」を literary giants にまとめる。ここを区別しないのは、大いに問題だ。

ハガードとシェイクスピアを並置することに疑問を呈する、あるいは批判するのが、中国の学界における普通のやり方である。例を示す。

周羽(2013)*²⁹の書いた論文表題は、訳せば「林訳『吟辺燕語』の誤解と魅力」になる。林訳を舐めようとする姿勢がその題名から透けて見える。

さっそく林紓がハガードとシェイクスピアを並べたところに文句をつける。まず、共訳者の魏易がチャールズ・ラムを完全に無視したことを咎める。そうして次のようにいう。翻訳して示す。

さらにでたらめなのは、林紓が序言のなかで一再ならず別の英国小説家ハガードをシェイクスピアと並べて挙げることだ。179頁

両者を並列するのは誤りだという。つまり、その文学成果と文学史での評価がシェイクスピア、ラムよりもずっと低い怪奇冒険小説家のハガードを持ち上げている、と批判する。

林訳ハガードは当時の中国人読者から広く歓迎された。翻訳出版件数も多い。林訳に対する鄭振鐸らの非難攻撃以来、現代中国においてハガードの評価は低い。それを基準にして「林序」を責めているだけ。林紓と魏易に彼ら独自の見解があってもいいとは思わないらしい。

杜甫と並べる

「林序」には、詩をめぐってシェイクスピアと杜甫が出てくる。ここを取り上げて批判する研究者を多く見かける。

莎氏之詩。直抗吾国之杜甫。

シェイクスピアの詩は、まったくわが国の杜甫に匹敵する。

ここでは、「莎氏之詩」はそのまま「シェイクスピアの詩」と訳しておく。この「詩」が誤解を引き起こす原因になっているからだ。

費春放の英訳も示す。彼女は自分の解釈を施していない。

【費春放】Shakespeare's poetry is quite comparable to that of our [great poet] Du Fu, p. 114

シェイクスピアの詩はわが国の(偉大な詩人)杜甫に完全に匹敵する。

西洋人には杜甫といっても理解されないと考えたのだろう。「偉大な詩人」を補った。

現代中国の知識では、シェイクスピアは劇作家である。だから、劇作家のシェイクスピアと詩人の杜甫では対比の対象にはならないと考える。林紓は何も知らず、比較できないものを並置しているという非難攻撃につながる。林紓が文芸の種類に無知だから劇作家と詩人を並列した、区別がつかないと批判する。

例をあげる。前出李春江がシェイクスピアと杜甫をならべた箇所について、次のように書いている。

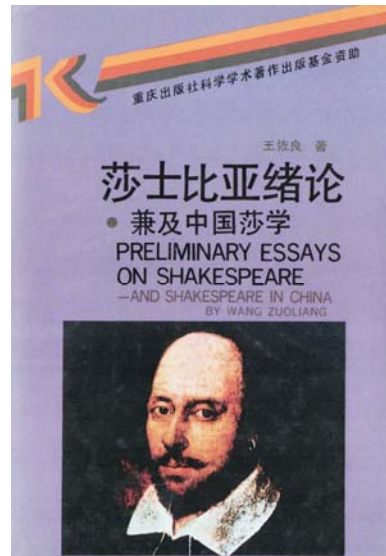
林紓はシェイクスピアを劇作家だとは決して見ていなかった。そうではなく詩人の仲間に入れた。王佐良氏は次のように考えている。中国古典文学の伝統では脚本と小説の地位は詩歌ほど高くはないから、林紓が文壇の人物を絶賛するとき、まず彼の詩を担ぎ出したのであろう、と。37頁

莎劇は脚本、詩は詩であると李春江は分ける。

王佐良の名前を出して自説を補強したつもりだ。中国古典文学の伝統をふまえて、シェイクスピアを称賛するために中国では格下の脚本ではなく上位の詩を取り出したという論理だ。それでこそ杜甫と釣り合いがとれる、と。

だが、彼には莎劇が詩そのものであるという基本的認識が欠落している。李春江にとってシェイクスピアは、あくまでも現代から見た劇作家でなければならない。

李春江は、王佐良の名前を出すだけで彼の論文名までは書いていない。中国では典拠を示すまでもないほどの定説になっているらしい。だから、王佐良が間違っているなどとは思っていない。



王佐良

そこで、王佐良(1991)*30の文章を見る。シェイクスピアと杜甫を並置する「林序」をかかげ、王佐良は「莎翁に最高の賛辞をあたえたものだ」(164頁)と認める。そうして、同時に不足も言いたてるのだ。

だが、この比較は完全に適切であるというわけではない。杜甫は詩人であるが、シェイクスピアは主として劇作家であるからだ。たぶん、中国古典文学の伝統で

は脚本と小説の地位は詩歌ほど高くはないから、文壇の人物を絶賛するときには、往々にしてまず彼の詩を担ぎ出すのである。シェイクスピアの脚本は韻文を用いて書かれており、ゆえに「シェイクスピア氏の詩(莎氏之詩)」というもきっぱりとは非難はできないにしても、ただ彼の並ぶものがないほどに輝かしい戯曲の天才を軽視しているのだ。164-165頁

王佐良は、莎劇が韻文であることは理解している。だが、どうしても戯曲に分類したい。シェイクスピアは詩人であるよりも劇作家であることの方が重要だという考えだ。林紓が「莎氏之詩」と書くと、それは正しい表記ではないと王佐良は理解する。

王佐良は別のところで少し違うかたちで説明している。「シェイクスピアの脚本は詩劇であり、大部分は韻文を用いて書かれている。しかし、脚本以外にも彼はいくらかの詩を書いており、主要には、以下のものがある」(142頁)という。ここから、王佐良の中では詩劇は詩劇であって詩ではないという区分ができていとわかる。戯曲と詩に分けるのだ。シェイクスピアの作品は全体が詩であって、その中に戯曲とそうでないものがある、とは考えない。

興味深いのは、王佐良の同書に収録した英文論文でも「莎氏之詩[。]直抗吾国之杜甫」に言及している。

For Lin thought Shakespeare's "poetic genius simply matched that of China's Du Fu" (「莎氏之詩[。]直抗吾国之杜甫」), and Du Fu was one of the two poets who were considered to have reached the peak of poetic achievement, the *ne plus ultra* in the long history of China's classical poetry. p.209

シェイクスピアの「詩の天才は中国の杜甫に匹敵する」と林(紓)は考えた。

杜甫は、詩的な成果に到達したふたりの詩人のうちのひとりであり、中国の古典的詩の長い歴史における極上の人なのだ。

王佐良は、俗論から離れることができない。あくまでもシェイクスピアを劇作家と詩人に分けて考えている。その自らの思考を「林序」に投げかけ、合致しているかどうかを検討する。林紓が「莎氏之詩」と書く場合の「詩」がどういう内容かは考慮しない。頭から自分の考える「詩」だと断定する。間違い。「莎氏之詩」は莎劇(詩)すなわちシェイクスピアの戯曲である。

王佐良の理解が李春江にも受け継がれていることがわかる。

周羽は、新聞広告と「林序」を区別していない。広告も林紓が書いたものとして扱う。不適切だ。本稿では「林序」部分のみを対象にする。その周羽も同じ箇所をあげて非難攻撃している。

小説を書いたハガードは林紓によって「文家」と見られ、シェイクスピアは「文家」とは対照的な「詩家」に属している。当然、シェイクスピアが英国の大詩人であるというのは決して間違っていない。莎翁の十四行詩(ソネット集)は彼の偉大な詩人としての名声をあげるのに十分だった。問題なのは、劇作家としてのシェイクスピアがあきらかに詩人としての莎翁よりも重要であり、しかもここで林、魏が翻訳したのは、莎劇に基づき改編した戯劇物語集であって、莎翁の十四行詩とはまったくなんの関係もないことだった。ゆえに広告と序言において莎劇を詩歌と理解し、戯劇物語集を「詩之紀事」、あるいは筆記小説と考えたのは、すべて理解にずれがあるのである。179-180頁

周羽は、シェイクスピアを劇作家と詩人に区別し、前者を重視すべきだと主張する。「林序」でシェイクスピアを詩人とするのは間違いだと指摘している。王佐良、李春江らと同じ考え方だ。これが現代中国の学界の常識なのだろう。

おかしな説明だ。

「莎劇を詩歌と理解」するのは、周羽から見ると誤りだそう。それこそ間違い。莎劇が詩であるという基本的知識が周羽にも欠落している。該書の主編である袁進は注意しなかったのだろうか。注意がなかったならば、袁進も同じ考えであると思われる。

「詩之紀事」が戯劇物語集、筆記小説だと考えることも間違いだという。周羽がそう判断したのは、字面の「詩」に惑わされたからに違いない。十四行詩を例にあげたのが証拠だ。よりもよって林紘が正しく理解していることを誤りだと断定する。理解に相当のずれがあるのは周羽の方なのだ。

「林序」の前半部分で莎劇(詩)を、最後部分でラム本について説明している事実を無視する。両者を分離せずに論じるのは、「林序」を真剣かつ誠実に読むという意識が周羽には最初からないからだ。林紘は無知であるという先入観に支配されているといわざるをえない。こういう例は多い。

劉半農がかつて明言した「林氏は「詩」と「戯」のふたつを識別していない」は、「林序」のこの部分も根拠にしている。

私がもう一度説明する。

「莎氏之詩」に注目してもらいたい。シェイクスピアの「詩」とは莎劇(詩)である。莎劇は無韻詩を用いた詩であることを忘れてはならない。莎劇は詩なのだから、中国でそれに匹敵するひとりには杜甫になる。詩という共通点で両者を繋いでいる。論理上の整合性を備えている「林序」に対して疑問を表明するほうがおかしい。

家庭から劇場へ

「莎氏之詩」は、別のところにも出てくる。

彼中名輩。就莎氏之詩者。家絃戸誦。而又不已。則付之梨園。用為院本。士女聯轡而聽。歎歎感涕。

名望のある年輩者のなかでシェイクスピアの「詩」をとくに好む者は、どこの家でも誰もが朗誦し、しかもそれで終わらず劇場にかけて用いて脚本とした(注; 後で説明する)。すると、紳士淑女は連れだって聞き入り、感動して落涙するのだった。

原文のままにした「詩」は「莎氏之(シェイクスピアの)」という修飾語がついている。これを理解しない研究者がほとんどだ。実は莎劇(詩)である。その莎劇(詩)が家庭から劇場へ移っていったところを表面だけ見れば、伝播の方向としては逆のように思える。莎劇は、まず劇場で演じられたのちに脚本になったからだ。現在でも研究者の多くがここを示して林紘の理解が間違いだと批判する。誰も内容を検討せずに断定する。

魏策策(2012)*31の論文を紹介しよう。

「林紘はシェイクスピアおよび作品に対する本来の様相についてそれほど明るくなかった」と書いて低く評価し貶める。上の「彼中名輩...」部分を引用し次のように述べる。

シェイクスピアは俳優、劇作家であり、その作品は先に上演され、後で本になった。だが、林紘の認識はそれとはちょうど反対で、先に「詩」があって後に上演されたと考えた。とても劇的なのは、林紘のシェイクスピア作品に対する想像が、シェイクスピアが初めて中国に入ってきた過程そのまま、つまり、改編された物

語から舞台に転じて上演された、というのとまったく同じだったことだ。この認識はシェイクスピアが劇作家であるという身分をまったく否定するのだ(後略) 477頁

魏策策は前半部分で「林序」にあることを示してカッコ付きの「詩」を使用した。その中身を説明しない。納得のいく解説ができないからだろう。私がいえば、今まで見てきたとおりこの「詩」は莎劇(詩)だ。脚本が先にあって後に上演されるのは、逆の方向になると魏は批判している。くり返せば莎劇は劇場で上演されたあと脚本として出版されたからだ。

魏策策は後半部分において、中国では物語を下敷きに脚本が書かれたうえで芝居として上演されたことをいう。確かに、物語である林紘『吟辺燕語』にもとづき脚本化し、それを中国人が演じたことがある。文明戯だ。しかし、その事実は『吟辺燕語』という翻訳をした時点の林紘が知るはずもない。脚本化されるのはその後のことだからだ。

よく見てほしい。伝播のかたちは似ているが内容が異なる。「林序」のばあいは莎劇(詩)から脚本へ変化したことをいう。一方の中国では、小説『吟辺燕語』からシェイクスピア作と称する脚本が書かれた。中身が違うことは明らかなのだ。

林紘はシェイクスピアが劇作家であることを否定している、と魏策策がそう述べる。そこは先に紹介した黄焯結、李春江、周羽らの考えと同じだ。これが現代中国学界の共通認識だとわかる。

脚本から家庭をへて劇場への方向を示した箇所だけを見て、林紘の把握のしかたは中国では誤りだとされている。

しかし、林紘と協力者の魏易^{*32}のふたりは、ともに豊かな学識を有した人たちだ。莎劇(詩)について、脚本から上演というような誤

解を犯すと考えるのは不自然でありかつ彼らに対して失礼である。「林序」を読んで私はそのように判断する。

私が解説する。

まず注目すべきは「名輩(名望のある年輩者)」だ。どこの誰かを特定していない。いつの時代であるかもわからない。書き出しからして、そういう話もあったという紹介である。伝聞の域を出ない。シェイクスピアよりもずっと時間を経た時代の物語だろう。

続いて「莎氏之詩」である。当然、莎劇(詩)を意味している。イギリスのどこかの名士が莎劇を気に入り、印刷された脚本を入手して家で朗読した。莎劇(詩)の評判を呼んだ結果、そういうこともあっただろう。あくまでも名前の知られていない人々の話である。

問題は原文の「院本」だ。「院本」が莎劇(詩)そのものだとすれば 多くの研究者はそう考えているのだが、莎劇(詩)が家庭に入り込み、その後に劇場に渡って莎劇(詩)になったことになる。そこで伝播の方向が逆だという批判につながる。

だが、そう読むのはおかしい。行きついた先が莎劇(詩)のままであれば、家庭における朗読は直接の関係がない。莎劇(詩)が各家庭に普及したことを説明してはいる。だが、それが莎劇(詩)そのものとして再び生成され劇場に登ったとつづけて読むのは不可能だ。

だいいち「莎氏之詩」と「院本」では用語が異なる。莎劇(詩)の変化をいうのであるから「院本」の語句が莎劇(詩)と同じであるはずがない。だからこの「院本」は莎劇(詩)そのものではなく、誰かが書き換えた韻文ではない、つまり詩形式ではない別の脚本だ。重点はシェイクスピア劇に人気があり、別の形に変化して広がったということを説明しているところにある。実際にそういう例があったが、ここで言っているのは名前を特定できない一般人のばあいを示している。

私が説明を加えた読みを提出する。

「しかもそれで終わらず、書き換えて劇場に
かける脚本とした」

莎劇(詩)の逆行などもとから「林序」には
存在していない。

前出の張曉陽が、わざわざ「林序」のこの部
分のみをとりあげて英訳している。これがまた
奇妙なのだ。

【張曉陽】Shakespearean poetic works
have been read by numerous families in the
world. When they are presented in the
theater to gentlemen and ladies, the
audience is always deeply moved. p. 103

シェイクスピアの詩的な作品は、世界
中の家族によって読まれた。それらが劇
場で紳士淑女に発表されると、観客はい
つも深く感動するのだ。

原文の「莎氏之詩」は英訳すれば“Shakespeare's
plays (dramas)”でなければならない。「林序」
においてはそれ以外の解釈は存在しない。とこ
ろが、張曉陽は「Shakespearean poetic works シ
ェイクスピアの詩的な作品」に翻訳した。「詩
的な作品」というのは何を指しているのか。説
明がない。

張曉陽が「poetic works 詩的な作品」と訳し
た思考回路をたどる。

シェイクスピアの作品を詩 poetry と戯曲 play
(drama)に二分する。彼も、その考えから抜け
出ていない。その意味で現代中国の研究者のひ
とりだ。ゆえに「林序」の「詩」が戯曲である
とは気づかない。かといって「詩」をそのまま
詩としてしまうと劇場で上演されることと矛盾
する。戯曲と言い切る知識がない。しかたなく
「poetic works 詩的な作品」というまわりくど
い表現にしたと思われる。意味が不明だ。張曉
陽が「莎氏之詩」の内容を把握していない証拠
である。

前出1903年の莎基斯庇爾につけられた肩書き
「世稱為詩中之王，亦為戲文中之大名家」を張曉
陽は、次のように英訳している。「Shakespeare
..... has been called the king of poetry. He was
also a famous dramatist. シェイクスピア.....は
詩の王と呼ばれてきた。また有名な劇作家でも
あった」99頁

原文にはない「dramatist 劇作家」を使用し
ているところからも、劇作家と詩人に分けてい
ることがわかる。

劇場に紳士淑女がいて彼らにむけて発表され
たものは、なにか。張曉陽英訳の文脈からすれ
ば、「シェイクスピアの詩的な作品」というこ
とになる。原文の「院本」という意味を含ませ
たつもりか。これといった説明もせず、あい
まいな翻訳にしてわけがわからない。

「林序」の「莎氏之詩」について明確な把握
ができず、それに加えて「用為院本」を捨てて
しまった。莎劇(詩)から別の脚本へ変化した
ことが見えなくなった理由である。

ここは、重要な部分だ。多くの研究者が林紘
を非難するばあい、彼が「無知」であることの
根拠にする。張曉陽は、問題の箇所を特別に引
用しながら、その問題については解説もしない。
張曉陽がどう考えているのかが不明だ。もしか
すると彼には問題があるという認識そのものが
ない。

彭鏡禧 CHING-HSI PERNG (2000)*³³は次の
ように英訳している。

【彭鏡禧】As far as I know, however, some
well-known personages among them are so
enchanted by Shakespeare that they recite
his poems or set them to music at home.
And, as if that weren't enough, they use
them as play scripts for the theater, where
ladies and gentlemen go and watch, and are
moved to tears. p. 2-3

しかし、私が知る限りでは、彼らのな

かのよく知られた名士の何人かはシェイクスピアに魅了され、家庭で彼の詩を暗唱し、あるいは音楽にした。それでまだ十分ではなかったかのように、彼らはそれを劇場用芝居の脚本として使用し、紳士淑女たちはそれを見に行き感動して泣くのだった。

問題が原文の「莎氏之詩」に集中していることがわかる。彭鏡禧は「his poems 彼の詩」にした。莎劇が詩であったことを彭鏡禧は理解していない。ここは「his plays(dramas)彼の戯曲」にしなくてはならなかった。

「院本」を「play scripts 芝居の脚本」と理解したのはいい。しかし、それが莎劇(詩)に基づいてあらたに改編されたものだと理解できなかったようだ。

李如茹(2003)*³⁴の英訳も似ている。

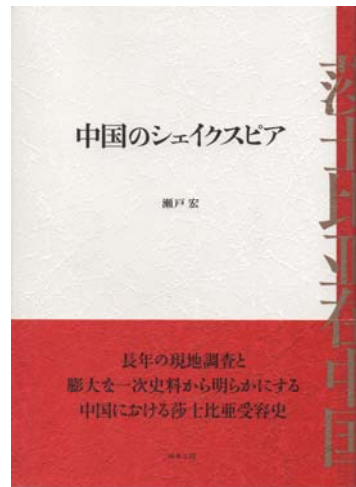
【李如茹】However, the fact is that the intellectual elite of the West is so fond of Shakespeare's poetry that every household in the country seems to be reading and reciting his lines all day long. Moreover, his verses were also used as scripts for performances on the stage and no women who were present as part of the audience were not moved to tears. p. 13

しかし、西洋の知的エリートはシェイクスピアの詩をそれほど好んだため、国中の家庭において一日中彼の台詞を読み、暗唱しているように思われているのが本当のところだ。そればかりか、彼の詩は劇場での演技のための台本としても利用され、観客のうちの女性で感動して泣かないものはいなかった。

李如茹も原文の「莎氏之詩」に引っかかっている。「Shakespeare's poetry シェイクスピアの

詩」に英訳する。この poetry は、後ろの「his verses 彼の詩」につながる。それがそのまま「scripts 台本」になると解釈していることになる。もしも、その「詩」が莎劇を意味しているのであれば、地方の誰ともわからない知的エリートが、劇場でそのままの莎劇(詩)を演じることになる。そう考えること自体が間違っているといままで述べてきた。

原文にある紳士淑女を女性だけにした理由は不明。



瀬戸博士

瀬戸博士が同じ箇所を取り上げて解説を加えている。

原文を翻訳しているのだが、3カ所に出てくる語句が微妙に異なる。別々に書いた論文を集めたのが原因だろうか。ページの順番に並べる。

【瀬戸博士】私の聞いているところによれば、彼らの名士はシェイクスピアの詩を酷愛し、あらゆる家々が愛唱した。そしてそれにとどまらず、劇界に与えて台本としたという。71頁

【瀬戸博士】私が聞いたところによれば、彼らの名士はシェイクスピア氏の詩を酷愛し、あらゆる家で愛唱されて終わることがない。そして劇界に与えて台本とし、男も女もそろって聞き、感激して涙を流

すという。90頁

【瀬戸博士】私の聞いたところによれば、彼らの名士はシェイクスピアの詩を酷愛し、あらゆる家々で愛唱された。そしてそれにとどまらず、劇界に与えて台本とし、男も女もそろって聴き、感激して涙を流すという。94頁

小さな違いであって基本は同じ、といえないこともない。

瀬戸博士は、次のような解釈をする。2例をあげる。

シェイクスピアはまず詩としてその作品を書き、後にそれが劇界の上演台本となったと認識していたことである。いうまでもなく、実際のシェイクスピア作品発表過程は、林紘の認識とは逆であった。71頁

ここに、林紘のシェイクスピア観が集中的に表現されている。林紘の認識では、シェイクスピア作品はまず詩として書かれ、それが広く愛唱されたため演劇の上演台本として用いられるようになったのである。94頁

ここに、瀬戸博士の無知、無理解と誤解が集中的に表現されている。

瀬戸博士は、上の部分は、シェイクスピア劇の成立状況を説明していると考え。本当にそう書いてあるのか。

「劇界に与えて台本」という「台本」の中身が問題だ。瀬戸博士は、シェイクスピアその人の脚本になったように説明している。ここが曲解だと私はいうのだ。

この上演台本はシェイクスピア劇そのものではない。林紘は伝聞であると明らかに書いている。イギリスの名も知れぬ好事家がシェイクスピア劇をとくに好みそれを家庭で朗誦し、そ

の後自分なりの脚本に書き換えて劇場にかけた、という意味でしかない。

瀬戸博士は、林紘をつかまえてシェイクスピアについての知識がなく「区別がつかない」人にどうしてもしたいらしい。 罫

【注】

- 28) 費春放 FAYE CHUNFANG FEI 編訳, *CHINESE THEORIES OF THEATRE AND PERFORMANCE FROM CONFUCIUS TO THE PRESENT*. (『中国戲劇理論：從孔子到当代』) THE UNIVERSITY OF MICHIGAN PRESS, 1999
- 29) 周羽「林訳《吟辺燕語》の誤解と魅力」袁進主編『中国近代文学編年史 以文学広告为中心 (1872-1914)』北京大学出版社2013.5
- 30) 王佐良「莎士比亞在中国的時辰」『莎士比亞緒論 兼及中国莎学』重慶出版社1991.4
- 31) 魏策策「以《吟辺燕語》為例探究林訳之“訛”」『福建工程学院学报』第10卷第5期(総第58期)《林紘研究專刊》 2012.10.8
- 32) 林元彪「魏易的翻譯」『外語教學理論与实践 (FLLTP)』2012年第3期 2012.8.25。通俗教育研究会會員魏易訳『泰西名小説家伝略』通俗教育研究会1917.3
- 33) 彭鏡禧 CHING-HSI PERNG “CHINESE HAMLETS: A CENTENARY REVIEW” 2000 電字版
- 34) 李如蔚 LIRURU, *SHASHIBIYA: STAGING SHAKESPEARE IN CHINA*. HONG KONG UNIVERSITY PRESS 2003

清末小説から

- 葉 庄新 対林紘訳莎劇故事の再認識 『外国語言文学』2007年第3期(総第93期) 2007.9.20
- 安 凌 文明戲時期莎士比亞戲劇的改訳及演出 『外語与外語教学』2012年第3期(総第264期) 2012.6.15
- 陳 歷明 莎劇最早的漢訳本：《海外奇譚》 『外国語(上海外国語大学学报)』第39卷第1期 2016.1.20

- 宋声泉 林紓与《新青年》同人結怨考辨 『漢語言文學研究』2013年第4卷第3期(總第15期) 2013.9.15
- 劉勇、李怡總主編 『中国現代文学編年史』第1-3卷 北京・文化藝術出版社 胡福君、陳暉主編第1卷2015.8、林分份、黃育聰主編第2卷2015.11、劉勇、李春雨主編第3卷2015.8
- 胡福君、林分份 本卷導言：清末民初的文学 (劉勇、李怡總主編) 『中国現代文学編年史』胡福君、陳暉主編 第1卷(1915-1919)北京・文化藝術出版社2015.8。林分份、黃育聰主編 第2卷(1906-1915)北京・文化藝術出版社2015.11
- 劉勇、李春雨 本卷導言：第一個十年的文学 劉勇、李春雨主編(劉勇、李怡總主編) 『中国現代文学編年史』第3卷(1915-1919)北京・文化藝術出版社2015.8
- 宋 莉華 『近代來華傳教士与兒童文学的謁見』上海古籍出版社2015.11 中西文学文化關係研究叢書
- 陶 春軍 『中国近現代通俗文学期刊風格研究 以《禮拜六》《小説月報》(1910-1920)《小説世界》為例』南京大学出版社2015.12
- 潘 建国 『物質技術視閾中的文学景觀：近代出版与小説研究』北京大学出版社2016.3 文学史研究叢書
- 李欧梵、季進選編 『海外晚清文学研究文選(英文)』上海・復旦大学出版社2016.3 蘇州大學海外漢学研究叢書
- 李 默 以“花界提調”之名論晚清上海都市文人的另類話語空間 『明清小説研究』2016年第2期(總第120期) 2016.4.15

『翻訳史研究』2015

上海・復旦大學出版有限公司2015.12

- 早期來華新教傳教士的中文作品与翻訳策略 以米憐為中心的討論司 佳
- 亦趨亦離：早期港英殖民政府的華人訳者(1843-1900)陳 雅晴
- 翻訳・政治・政治小説 略論《瑞士建国》在東亞的翻訳与伝播徐 黎明

『蔵書家』第20輯 2016.1

- 民国通俗小説過眼録(中)張 元卿
- 知堂蔵書小考姚 一鳴

陳麗菲主編 『上海近現代出版文化變遷個案研究』上海辭書出版社2016.3

- 20世紀30年代上海圖書出版人力資源研究.....陳 沛雪
- 民初女性伝媒構建的上海女性及生活導向 以《婦女時報》為中心趙 蓓紅

『中国現代文学研究叢刊』2016年第5期 (總第202期) 2016.5.15

- 女報与近代中国女性小説創作的發生 以發刊詞和徵文廣告為中心馬 勤勤
- 《俠女奴》与周作人新体白話經驗的生成.....宋 声泉
- 從魏子安到林琴南 論姚鵠雛小説的師承...張 蕾

『中国現代文学研究叢刊』2016年第6期 (總第203期) 2016.6.15

- 論民初通俗作家对袁氏帝復辟逆流的声討...黃 誠
- 陳小翠戲劇創作中的“新女性”郭 梅

清末小説研究会ウェブサイト公開予告

- 樽本照雄 『林紓冤罪事件簿(統合増補版)』
- 樽本照雄 『清末翻訳小説論集(増補版)』
- 樽本照雄 『漢訳アラビアン・ナイト論集(増補版)』



『林紓冤罪事件簿』と『林紓研究論集』を統合し、いくつかの関連論文を増補したものです。